

異世界魔王の記憶を持ったオリ主

カワイイもの好きのスライム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、ハイスクールD×Dと魔王学院の不適合者×FGO×BLEACHのクロスオーバー作品です。

中にはBLEACH要素が出てきますが用いているのは斬魄刀と鬼道・縛道だけです。（タグ欄に入りきらなかったので、ここに書きました。）

この4作を混ぜ合わせたら何気に面白いのでは？と思い書き始めました。

2000年前の神話の時代、暴虐の魔王アノス・ヴォルデイゴートは精霊界・人間界・魔界・神界と戦をしていた。しかし、魔王アノスは戦争が好きではなく民を守るため致し方なく戦争をしていた。が、あるときアノスは自分の命を持ってそれぞれの土地に壁を作り戦争が起きないようにすることを決意する。

これは、自らの命を犠牲にした際にハイスクールD×Dの世界に異世界転生してしまい再び『暴虐の魔王』として国を統治するお話――

主人公は、アノス・ヴォルデイゴート。決して、兵藤一誠ではありませんw

*注意

・基本的に原作通りに進めますが、途中オリジナル展開を挟みます。
・本編の合間に『キャラ紹介』と称して武器や神器、用語解説を挟みますが読んでもらった方が分かりやすいと思います。(強制はしません)

・本作は超ご都合主義です。なので、アノスは基本的にチート級ステータスです

・一誠が主人公じゃないと嫌な人はブラウザバックをオススメします。

・一応、わかりませんがハーレムタグつけました。

目次

プロローグ	1
転校初日の出来事	8
新しい仲間	26
謝罪とご報告。	51
麗央の怒り&意外な人物	53
訓練前日	78
訓練①	94
訓練②	105

プロローグ

2000年前の神話の時代、この世界では暴虐の魔王と呼ばれる冷徹で冷酷、残忍で気に食わなければなんでも破壊の限りを尽くす魔王〈アノス・ヴォルディゴート〉がいた。彼を滅ぼすべく人間界、魔界、精霊界、神界で戦争が起きていた。

ただ、彼は極度の戦嫌いで、最初に仕掛けてきたのは、伝説の勇者カノンたち人間だった。

それに乗る形で精霊や神界も攻め込んできた。それを迎撃し、自国の民を守るため、暴虐の魔王は戦っていたのだ。

「はあ、いつになったらこの戦争は終わるんやら」

黒いローブを纏いながら顎に手を置いている黒髪で長身の男は、そんなことを呟きながら玉座に腰を掛けている

「それは、我々魔族が、貴方様がご存命する限り無理なことでしょう」

そう返してきたのは、左目に眼帯を付け、腰には漆黒の長剣を指し、魔王と同じ黒いローブを付けている者がいた。彼の名前は、シン||レグリア。アノス・ヴォルディゴートが最も信頼し、最強と謳われる剣士だ

彼の手にかかれば、どんな剣であろうと使いこなすことが可能なのだ。それが例え、勇者専用の剣であってもだ……

彼の言葉を聞いたアノスは、シンに和平を結ぶことを言った

「シンよ、俺は勇者カノンを始めとし精霊界・人間界・魔界・神界に絶対に壊れないーそうだな2000年間は誰にも破れない壁を作ることにした」

それを聞いたシンは、驚いた顔をしていた。それは、アノスが命を賭して大魔法 四界牆壁（ベノ・イエヴン）を発動すると言っているのと同じだからだ。

しかし、彼の眼には一切の迷いはなく、覚悟さえも感じられた。それゆえ、シンは彼の言葉を否定することはしなかった

「御身がそう判断されたのならば、私はなにも言いますまい」

「そうか。シンよ、転生しても俺の傍にいてくれるか？」

「もちろんですとも。この身は御身の剣であり盾でもあるのですから」

「お前がいてくれれば、安心だな。さて、明日にでも勇者カノン・大精霊レノ・創造神ミリティアを呼ぶとするか。手配してくれ」

「既に精霊界・神界・人間界に書状を送っておきました。時刻は、明日の夕刻。場所は、ここデルゾゲート」

「さすが、シンだな。よく俺の行動を理解してくれたな」

そう言つて、シンはその場を後にした

そのころ、精霊界・人間界・神界に書状が送られてきた

それを受け取った各界は驚きや怒りを露わにしたが、恐る恐る読んでみることにした

そこには、こう書かれていた

『 各界人へ。』

我、暴虐の魔王アノス・ヴォルディゴートは、戦は好きではない。今まで、争ってきたのも元を辿ればそちらが進軍してきたからである。我々も民を守らないとならない故、迎撃させてもらった次第であ

る。本音を言えば、戦争はもう飽きた。俺は、平和な世界で暮らしたい。そのために明日、俺の命を賭して、大魔法 四界牆壁（ベノ・イエヴン）を発動したいと思う。これは、攻撃魔法でもなんでもなくただの結界魔法だ。これを使い精霊界・人間界・魔界・神界に壁を作り最低2000年間は破れない壁を作る。その際に、勇者カノン・大精霊レノ・創造神ミリティアの力を貸して欲しい。時刻は明日の夕暮れ。場所は我が城へデルゾゲートへ行おう。協力してくれ

暴虐の魔王より 』

「こんなの嘘だ！誘い出して殺す気だ！」

「罨だ！」

「厭らしい手を使いよって」

様々な声が上がっていたが、中には「これで平和になる！」とか「やつと戦争が終わる」と言った声が多数上がっていた

「でも、僕は行くよ。誰がなんて言おうともね」

「私も行きますわ。カノンだけじゃ心配だわ」

「・・・私は、2人に任せる」

勇者カノン・大精霊レノ・創造神ミリティアは、魔城へデルゾゲートへ向かって歩み始めた

数分、歩くと目の前に全部で3棟からなる黒い城が見えてきた

あれが魔城へデルゾゲートである

城門前には、左目に眼帯を付け、腰には漆黒の長剣を指し、魔王と同じ黒いローブを付けているシンレグリアがいた

「来ましたね。時間通りです」

「君は？」

「私は、貴方達を御身の所まで案内するシンⅡレグリアと申します。
一応、御身の右腕です」

「そうか、君が・・・」

「・・・」

カノンとシンが話している最中、レノとミリティアは終始静かだった

デルゾゲートに入り、歩くこと数十分。

一行の前に現れたのは、黒いローブを纏いながら顎に手を置いている黒髪で長身の男へ「暴虐の魔王」が漆黒の玉座に座っていた

「勇者カノン・大精霊レノ・創造神ミリティア、我が城デルゾゲートに来てくれて感謝する。今回呼んだのは、書状にも書いた通りこの命を賭して和平を結びたい」

「「和平？」」

「そうだ、内容はこの根源を勇者カノンが持つ霊剣人剣エヴァンスマナが刺し、大精霊レノと創造神ミリティアの二人でその根源を滅ぼすことで大魔法四界牆壁（ベノ・イエヴン）は発動する。一回発動すれば、誰にも解除できん。唯一の解除法は俺が転生し、生まれ変わったときだけだ」

「暴虐の魔王アノス・ヴォルデイゴート、本当にいいんだね？」

「ああ、構わぬ」

そう言つてアノスは自分の右胸に魔法陣を浮かび上がらせ、無防備で立っていた。

それを見た勇者カノンは、覚悟を決め霊剣人剣エヴァンスマナで刺し大精霊レノと創造神ミリティアは、自身の魔力全部を1つの魔法に注いだ

すると、アノスの体は光を発しながら消えていき、約束通り大魔法

(四界牆壁ベノ・イエヴン) が発動した

それを見ていた勇者カノンは、小声で「今度、会うときは友人として」と言った

発動したことにより、各種族間の戦争は終わりを告げた

「・・・(ここは、どこだ？さつきまで、デルゾゲートで勇者カノン・大精霊レノ・創造神ミリティアといて・・・それから・・・自分の根源を・・・壊させたんだっけ？つまり、俺は死んだのか・・・これで世界は平和だな。できれば、平和な世界を見てみたかったな・・・)」

アノスは、根源を滅ぼされたあと暗闇の中に一人佇んでいた。

そこには、なにもなく暗黒の世界が広がるのみだ。どれだけ時間が進んだのかさえもわからない・・・

冷たいや熱いと言った感覚もない、それに自分の体があるのかさえも感じられない・・・

(そこで浮かんでいる男よ、聞こえるか?)

すると、突然どこからかキレイで上品な声が聞こえて来た

しかし、声を発することはできない。どうやって応えようか考えていると・・・

(応え方がわからぬのだな？応え方は、念話じゃ。思ったことを念じるのじゃ)

そのキレイで上品な声も持ち主は、念話で話すのだと教えてくれた言われたとおり、念じて話してみる

(聞こえるぞ)

(成功じゃな。できてよかったな)

試しにやってみたが、本当に返事が返ってくるとは思ってもしなかった

(我に聞きたいことが山ほどあるじやろうが、まあ話を聞き給え。)

そう言われたので、話を聞いてみることにした

その話を聞いて分かったことは、先程自分は勇者の剣に根源を刺され、残りの二人に滅ぼされたということ。肉体は既に死んでいるため手を動かすことも、口を動かすこともできない状態であること。死んでから1時間は経っていること。話している相手が時間神クロノスであることがわかった

(其方よ、もう一度人生を送りたいか?)

(そんなことができるのか?できれば平和な世界に行きたいな...) (結論だけ言えば可能じゃ。今の体ではなくお主の記憶を全て引き継いだ別の人物という形になるがの。ちなみに転生する世界は決まっておる)

(ほう、どんな世界なんだ?)

(行く世界は『ハイスクールD×D』の世界じゃ)

(そこはどんな世界なんだ?)

どんな世界なのか質問すると、異空間からたくさん紙を出した

その参考資料と説明を聞く限りだと、その世界には悪魔・天使・墮天使・ドラゴンが存在し上級悪魔がチェスの駒に例えられ、悪魔の駒(イーヴィル・ピース)を用い眷属を増やし人間界に來たはぐれ悪魔なんかを狩ったりする世界だった

どう考えても平和な世界じゃない...どうしようか悩んでいると、クロノスが「今ならどんな力でもあげるのじゃ」と言ってきたので、乗ることにした

(よかろう、転生してやる)

(そつか。なら欲しい力とか連れていきたい人とかいれば言うのじゃぞ。用意してやるからの)

(なら、まずここにある二天龍の力が欲しい。それもフルの状態でな。それと、精霊と契約できるようにしろ。それから、死ぬ前に作りだした7人の部下を転生体―つまり人間体として、創造神ミリティアの転生体としてミーシャ・ネクロンを、破壊神アベルニユーの転生体としてサーシャ・ネクロンを双子として転生させて欲しい。もちろん彼女らも人間体でな。あとはサーヴァントとしてアルトリア・ペンドラゴンとジャンヌ・ダルクを。あとは、この2本の刀が欲しい。もちろん、能力を全部使える状態で。あと、俺が転生しても俺本来が持つ力をフルで使えるようにして欲しい。あ、大事なことを忘れてた。生前俺の右手だったシン||レグリアも人間体として転生させてくれ。以上だ)

(お主、随分と強欲じゃの。まあ、良いわ。其方の頼み全部叶えてやるのじゃ)

(ちなみに、転生後の家とかはあるんだろうな?)

(もちろん、あるから安心せい。他に聞いておくことはあるか?)

(特にない)

(なら、転生させるからの)

そして、魔王アノス・ヴォルディゴートは暁麗央として駒王町に転生したのである。

転校初日の出来事

時刻は、朝の7時

窓際からの差し込む光に当てられて起きた者がいた。

彼の名は、暁麗央。転生者だ

「もうこんな時間か。時間が過ぎるのは早いな」

起きた際に彼が毎回言う言葉だ

ベットから起き上がると足元に魔法陣を書き、今日から通う学校の制服に着替える

そう、彼は普段から着替える時は魔法で着替えるのだ

着替え終わると下から良い匂いがしてきた

どうやら下で双子のサーシャとミーシャが料理をしているようだ

良い匂いにつられ、リビングに向かうと金髪のポニーテールに赤紫色の目をしたサーシャと銀髪の髪 of 両端にひし形の髪飾りをし、碧い目をしているミーシャが朝ごはんと3人分のお弁当を準備していた

そう、この家に住んでいるのは麗央だけでなくサーシャとミーシャも一緒に住んでいるのだ

なぜ一緒に住んでいるのかという時は遡ること数年前のこと

当時、中学生だった麗央の両親は料理人で近くのホテルで行われる催し物のサポートスタッフとしてホテルに行き、調理をしていた。が、ある従業員が休憩中に事務所でタバコを吸いながら休憩しており、その休憩が終わり仕事に戻る際にタバコの火をちゃんと消さずに戻ってしまい結果、その火が店内に回り店は全焼。当時働いていた従業員と両親、タバコを吸っていた従業員、店内で買い物や食事をし

ていた客が焼死体となって発見された。

しかし、その訃報を聞いても麗央は特段焦る様子も見せなかった。なぜなら、生前両親は彼に「なにかあったら、ここに連絡をしない。きつとあなたの力になってくれるから」と言われていたことを思い出し、連絡をして来てくれたのがサーシャとミーシャであった。もちろん、彼女たちも転生者である。それから、その翌日から彼女らとは一緒に住んでいるのだ。

内心では悲しんでいたが、よくよく考えてみると彼女たちを転生させたのは麗央なのだから両親が死ぬのは既に決まった運命だったのかもしれないと考えたこともあった

そんなことを考えボーとしているとミーシャが下から顔を覗き込んできていた

どうやら、なにも動かずボーとしていたからか心配したらしい

「麗央、元気ない・・・」

「なに、気にするな。昔のことを思いだしただけだ」

「ふーん。なにか悩み事があったら聞くわよ。まあ、あんたにはないでしょうけどね」

「わかった、その時は2人にすぐさま相談しよう」

ミーシャとの会話に入ってきたのは、サーシャだった

どうやら彼女も心配してくれるらしい

「それより、ご飯にしましよ♪せっかくの料理が冷めちゃうわ」

「そうだな、飯にするか」

「うん」

いつの間にかテーブルの上には料理が並べられていた

どうやら、俺が昔のことを思い出しているときに並べたらしい

テーブルの上に置かれた料理は、コーンスープ・サラダ・ご飯・焼き魚・フルーツだった

それから3人は食べる前の挨拶をして、食べることにした

「この焼き魚、焼き加減が絶妙でうまいな」

「よかったね、サーシャ」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「ミーシャは、この味噌汁を作ったのか？」

「そう、飲んでみて」

「この味噌汁も出汁がちゃんととれていてうまいぞ」

「よかった、嬉しい」

「また、作ってもらいたいものだな」

「／＼／＼」

麗央の思いも寄らない言葉に2人は頬を赤く染めていた

他愛のない会話をしながら食事していると時刻は、まもなく7時40分になろうとしていた

今日が初登校の3人は急いで食事を済ませ、洗い物をし洗濯物をした

それから数分して家を出て、通学路を歩いているとー

『ねえ、あの子イケメンじゃない？』

『ほんとだ、どこのクラスの子かな？』

『もしかして、転校生じゃない？でも、その横の2人もかわいい〜』

様々な黄色い声が聞こえてきたが、無視をして歩くことにした3人

「麗央、モテモテ」

「そんなことないぞ。俺にはサーシャとミーシャがいてくれるだけで

十分だからな」
「／＼／＼」

麗央の言葉を聞いてまたもや2人は頬を赤く染めていた
すると、目の前に駒王学園が見えてきた

その学校は、両サイドに木々が何本も生えており、歴史を感じる建物だった

すると、麗央たち3人は昇降口ではなく来賓用の入り口に向かいそのまま職員室に向かった

職員室前に着き、へコンコン♪とノックをするとへどうぞ〜という声が聞こえて来た

目の前に現れ、対応してくれたのはいかにも怖そうでガタイの良い男の先生だった

『君たちは?』

『えっと、私たち今日から転校することになって登校したら職員室に来なさいって柘先生に言われて・・・』

『あー、君たちが。わかった、今、柘先生を呼ぶからそこで待っていないやい』

『はい』

『柘先生、きましたよ』

『はい、今行きますー』

『今来るから、もう少しそこで待ってなさい』

数分待っていると奥の方から大量のプリントを持った女の先生が『お待たせー』と言いながら小走りやってきた
どうやら、先程までコピーをしていたらしい

『お待たせ。今日から貴方たちの担任になる柘佳織です。よろしく』

自己紹介が終わると、先生が前に出てきて席を指定してくれた。その結果、3人は窓側の一番後ろの席とその横の席と斜め前の席となった。

座り順で言うと窓側の一番後ろの席に麗央が、その横にサーシャが、サーシャの斜め前にミーシャが座ることになった。

〈キーンコーンカーンコーン♪〉

それから暫くすると、ホームルーム終了の鐘が鳴った。

鐘が鳴った瞬間生徒たちが麗央の席周辺に集まり、質問攻めにしてきた。

何個かは質問を聞き逃したが、その他の質問には全部返せたと思う。質問攻めが終わると、サーシャとミーシャがグツタリしていた。

それから、あることを考えながら残りの全部の授業を受け、やっと放課後になった。

(一誠が殺されるの明日なんだがな、どうしたものか)

(おい、相棒。あいつを助けるのか？なんの価値もないやつを)

(ドライグ、助けないと話が先に進まないじゃないか！)

(そうなんだがな、あいつを助けるのにあまり気が乗らないだけだ…)

(その気持ちは、わかる。私も気が乗らん)

今、念話で話しているのは赤龍帝ドライグと白龍皇アルビオンだ。

この2匹のドラゴンは、かつて二天龍と言われ悪魔・墮天使・天使が大規模な戦争をしているときに乱入し、その結果どの陣営にも甚大な被害がでたことで各勢力は共闘という形をとり、2匹のドラゴンを神器に封じ込めることに成功した。要は簡単に言えば、バカだが力は本物だということだ。

そのころ一誠は帰路に着こうと歩道橋を歩いていた
すると前から1人の少女に声をかけられた

「あ、あの！兵藤一誠さんですか？」

「そ、そうだけど君は？」

「私の名前は、夕麻。天野夕麻つていいいます。」

「それで、何の用かな？」

「あ、あの・・・わたし・・・一誠さんに一目惚れ・・・してしまいま
した。なので・・・付き合ってください」

「(何この子、めっちゃ可愛い！しかも、俺のタイプにどストライク！)
も、もちろんいいよ」

「あ、ありがとうございます！」

翌日になると、見慣れた光景を目の当たりにした

一誠が夕麻と一緒に登校していたのだ

ちなみに、俺は転生する前に時間神クロノスによって何回も見せら
れたから見慣れているのだ・・・

周りからは、驚きや皮肉の声が上がってきていた

『嘘だ！あんな変態の兵藤を好きになるやつがいるなんて』

『きつと、弱みを握られているんだわ！』

『なぜ、一誠に彼女が!？』

『あんな変態のどこがいいんだか』

一誠は、どんなもんだいって顔をしていたが普段からの行いを考え
れば周りの反応も当たり前なんだがな・・・

でも、気の毒なものだな・・・

付き合ってる彼女が本当は墮天使で、今日殺されるんだから・・・

そんなことを麗央が考えていると一誠と夕麻は校門前で何かを
言って別れた

それからというもの一誠は非常に嬉しそうだった

なぜなら、今朝校門前で言ったこと・・・それは『今日の放課後デートしようね♪』と誘われていたからだ

そして、放課後になると一誠は一目散に学校を出て駅近くにある時計台に向かって走っていった

「サーシャ、ミーシャすまなぬが急用ができた。先に帰っていてくれ」
「・・・」

「その急用って？」

「今日の夜、兵藤が殺されるから助けないな」

「あーレイナーレに殺されるイベントね」

「そうだ」

サーシャもミーシャも今日これから起きるすべてのことを知っていた

なぜかって？それは、昨日帰ってから2人にこの世界に転生する前の出来事全てを見せたからだ。まあ、そのときは麗央が暴虐の魔王アノス・ヴォルデイゴートの転生体だと知って2人とも驚いていたが・・・

だから、彼女たちは全てを知っている。一誠が殺されることも・・・この学校にオカルト研究部があつて、そこにはたくさんのお邪魔がいることも・・・

しかし、サーシャとミーシャは全く興味がないようだった

そして麗央は、サーシャとミーシャを先に帰らせ気づかれないように一誠の後を追っていた

待ち合わせ場所に着くと、一誠と夕麻が同じタイミングだった

「おまたせー待った？」

「いや、大丈夫だよ。俺も今着いたばかりだから」

「そっか、良かった」

「じゃあ、行こっか」

「うん♪」

それからというものの2人は王道のデートコースを回っていた

ショッピングしたり、ゲームセンターに行ったり、カフェでくつろいだり、カラオケしたりと・・・

楽しいひと時は、短かった

すぐに空はオレンジ色になりかかっていたが、2人はなぜか近くの公園に向かって歩いていった

「ねえ、一誠君。今日のデート楽しかったよ、ありがとう」

「そっか、それはよかった。俺も楽しかったよ」

「最後に1つだけお願い聞いてくれる？」

「もちろん、俺にできることなら何でも聞くよ」

「ほんと？嬉しい。じゃ、死んでくれるかな？」

「・・・あれ？俺、最近耳おかしいのかな？もう一回言ってくれろ？」

「死んでくれない？」

一誠にそう言いながら夕麻は背中から4枚の羽を出し、手にはいつの間にか生成した光の槍を持っていた

そのサイズは、某キャラが持つ赤いグングニルよりも太く長いものだった

一誠は、なにが起きているのか理解できずに腰を抜かしていた

「ま、待っててくれよ！なんで俺が死なないといけない！そもそも、あんた誰だよ！」

「私は、墮天使レイナーレ。それが本名。貴方の知っている天野夕麻

は仮の姿よ。それと、あのお方が貴方の神器は危険な物だから今のうちに殺しときなさいって仰ったのよ」

「あのお方？あのお方って誰だよ！その神器ってなんだよ！」
「貴方に言う必要ないわ！死になさい」

レイナーレは、そう発しながら手に持っていた光の槍を一誠に向かって投げた

当然、その投げた槍は一誠の胸を貫通し、赤い血を流しながら絶命した

しかし、レイナーレはそれだけでは止めなかった。

既に死んでいる一誠に向かって光の槍を数十作り跡形もなく消し去ろうとしていた

流星に跡形もなく消されたら、悪魔の駒（イーヴィル・ピース）で復活させることは不可能なため、レイナーレの前に立つことにした

「そこまでだ。流星にやりすぎなんじゃないか？既に絶命している相手に消し炭にするのは」

「?!あんだ、誰よ！ここには、人払いの結界が貼ってあったのにどうやって入ってきたのよ」

レイナーレは急に目の前に現れた麗央に対して憤りながら聞いてきた

「俺は、麗央。暁麗央だ。よろしくな？堕天使。それと確かに結界は貼ってあったぞ。しかし、あのくらいの結界なら結界の一部を切って修正するのはとても簡単にだぞ」

「そ、そんなことができるわ」できたから俺がお前の前にいるんだが？」

「……」

正論を言われレイナーレは、暫く下を向いて黙っていたが顔を上げ

ると「そいつ諸共死ねええええ！」と叫びながら数十もの光の槍を投げ来て来た

「遅いし、生ぬるい攻撃だな」

そう言いながら麗央は、異空間収納から頭に白いさらしが付き、それが鞘替わりになっていて柄や鞘・鏝・刀身の手元の部分にはめる金具がない出刃包丁のような姿が特徴的な刀を出し、横に薙ぎ払った

それにより、刀からの斬波によつて数十あつた光の槍が一瞬にして消し去った

「数十あつた私の光の槍をこうも簡単に・・・その刀はなに!?!」

「これか?これはな斬魄刀と言つてな、刀の中に本来の姿が眠つていてな様々な力を有している刀さ。それに斬魄刀は普通、名を呼ぶことで力を開放するが俺のは『常時開放型』だから名を呼ばずとも本来の力の5割を發揮できるといった優れものだ」

「・・・」

レイナーレは説明を聞いても理解できず、固まっていたためアノスは瞬歩を使ってレイナーレの背後に接近し4枚の羽根を根元から切り裂いた

レイナーレは切り裂かれたことに気づかず地面に落下していった
痛みに気づいたのは、地面に落下したときの衝撃と一緒のときだった

「ぎやああああああ!!」

「貴様、なんてことをしてくれる!せつかくの羽根を!」

「何って切り裂いただけなんだがな・・・それに戦闘中にボーとしているお前が悪いと思うが?」

そう言っている麗央は地面に転がっているレイナーレにトドメを

刺そうとしたが、空から攻撃をされトドメをとどめを刺すことができなかつた

暫くして空からレイナーレと同じ黒い羽根を4枚持つ墮天使が現れた

「貴様は、何者だ？」

「我は、ドーナシーク。神の子を見張る者(グリゴリ)に所属している。今日の所は、すまないがまだそやつを殺されるわけにはいかないの
で、失礼する！」

そう言い放つとドーナシークは、目くらましをしてどこかに飛んで
行った

ドーナシークの姿が見えなくなるとアノスは異空間に刀をしまい、
どこかに言葉を言い放った

「そこに隠れているやついい加減に姿を見せたらどうだ？」

辺りを見渡すと確かに誰もいないにだが、気配だけはその場にあつ
た

すると近くの茂みからガサゴソという音を立てて赤い髪をし、駒王
学園の制服を着た人物と仲間が出て来た

「ほう、若手悪魔で現魔王の妹リアス・グレモリーとその眷属とは随分
と珍しい奴が来たな」

「!!確かに私はリアス・グレモリーだけど、なぜ貴方が私の素性を知つ
ているのかしら、暁麗央くん？」

「そんなことより早く早くしないと赤龍帝が死ぬぞ?早く悪魔の駒 (
イーヴィル・ピース) を使ってやれ」

「そ、そうだったわ。でも、彼を助けたら話を聞かせてもらえるかしら
?」

「ああ、よかろう」

数分すると先程まで一誠の胸に空いていた大きな穴がみるみる塞がっていき、最後は全部閉じることに成功したのだ

「あとは、彼を自宅に戻して私の魔力で回復させるだけね」

「ええ、そうですね。明日には、完全回復ですわ」

リアス・グレモリーに同意するように言ったのは、学園内で2大お姉さまと言われている姫島朱乃先輩だった

「そんなことをしなくてもすぐに魔力回復できるぞ。そいつを貸せ」

「ちよ、ちよつとー!」

麗央はリアスから一誠を横取りし、ある魔法をかけた

「総魔完全治癒（エイ・シエアル）。これですぐに魔力は回復する。あとは寝かせるだけだぞ」

「あ、ありがとう」

「別に構わぬ」

「それで貴方は何者なのか話を聞かせてもらおうよ!」

「説明してやろう。知っているとと思うが俺の名は、暁麗央。今日来たばかりの転校生だ。お前たちのことはこいつから聞いた」

「よお、俺の名は赤龍帝ドライブ。こいつに色々説明したのは俺だ。ちなみにそいつの中にある神器も俺の力だ」

「赤龍帝ドライブ!?あの二天龍のですか?!」

「(ああ、そうだ。他に二天龍と言われてなにがある?)」

「そ、そうですね…それで、一誠の神器も赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)ですけど…」

「(それはな、麗央が持っている赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)が本物でその小僧が持っている赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)は俺の体の一部が神器化したものだ。だから、小僧がいくら強くなろう

と最大火力は5割しか出せん。一方でアノスの神器は本物だから100%の力を出すことができるのだ。ちなみに麗央は禁手（バランス・ブレイカー）まで至っているが、その小僧には禁手（バランス・ブレイカー）は無理じゃ。使おうとすれば寿命を極端に減らすぞ」「そんな・・・そんなことって・・・」

「一誠君、かわいそうに・・・」

「一誠君、かわいそうですわ」

「・・・」

クール系イケメンの木場やマスコットみたいにかわいい塔城、姫島先輩は一誠に同情していた

「話は終わったから帰らせてもらおうぞ」

そう言い残し、麗央は転移（ガトム）を使って一瞬でその場から消え自宅前についた

扉を開けると、玄関前にサーシャとミーシャが向かいに来てくれて、「おかえり」といつてきた

翌日になると、一誠は何事もなかったかのように普通に登校していた

変わったことと言えば、昨日まで一誠の彼女だった天野夕麻の姿がなかったことと誰もましてや一誠も彼女のことを覚えていないことぐらいだ

昼休みになると、木場がクラスにやってきて俺と一誠に話しかけてきた

「一誠君、麗央君放課後、空いてるかな？」

「別に予定はないけど・・・なんか用か？」

「俺も別にないが、なんだ？」

「じゃあ、放課後ついて来て欲しい所があるんだけど良いかな？」

「あ、ああ別に構わねよ」

「良いだろう」

「よかった、ありがとう」

それだけ言い残し木場はクラスを出て行った

放課後になると、木場がまたクラスにやってきて俺と一誠を連れて廊下を進んでいった

『変態組の一誠と麗央君と木場君が一緒なんてあるえない！汚れちゃうわ！』

『麗央君と木場君から離れなさいよ!!』

など皮肉や軽蔑の声が廊下のあちこちから聞こえてきて、そのたびに一誠はしゅんとした顔になっていた

ちなみに、アノスの後ろにはサーシャとミーシャも同伴している木場に聞いたところ同伴でも構わないと返答が返ってきたためだ

暫く廊下を歩くと旧校舎が見えて来た

建物的には随分と古いが、いぎ中に入ってみると廊下や壁はどこも壊れてなく、その上塵や埃も一つもなくまなくキレイにされていた
すると、すぐに目的地に到着した

そこには〈オカルト研究部〉と書かれた表札がかかっていた

「部長、2人をお連れしました」

すると、中から「入りなさい」という声が聞こえて来た

「失礼しまーす（するぞ）」

「失礼するわよ（します）」

麗央と一誠が先に入り、続いてサーシャとミーシャが部屋に入る形となった

「来たわね、2人とも」

「あ、貴方は学院の2大お姉さまのリアス・グレモリー先輩、そして姫島朱乃先輩ではないですか!!」

「ええ、そうだけど・・・そんなに興奮しなくても・・・」

学院の2大お姉さまを見て興奮している一誠をみてリアス・グレモリーと姫島朱乃の2人はドン引きしていた

「今日2人を呼んだのは、理由があるの。その前に2人のことはイツセーとレオって呼んでもいいかしら？」

「それは、いいですけど・・・」

「俺も構わない」

「まずはイツセー、貴方昨日事故にあって死んだわ。」

「はあ？」

なるほど、昨日のことは事故にあったという筋書きに変えたらしいな

それなら、今朝登校したときに天野夕麻について誰もましてや一誠も覚えてないのも辻褃合うな・・・

めんどくさいことを良くもご厚意でやるもんだな

それにしても、一誠から今素っ頓狂な声が聞こえたけど大丈夫か？

「な、なにを言ってるんですか？部長・・・そんな冗談やめてくださいよ。心臓に悪いですよ」

「冗談じゃないわ。全部本当のことよ」

「部長、端的に言いますわ。ちゃんと順を追って説明しないと」

「それもそうね。端的に言い過ぎたわ。ちゃんと説明するわね」
「イツセー、貴方昨日学校帰りにボサツと歩いていて信号が赤なのに気づかずに渡ろうとして車に轢かれて死んだのよ。それを私たちが回収して転生させたってわけ。その証拠にほらね」

リアスは一誠に嘘の説明をしながら、自らの背中に生えた黒い羽根を兵藤に見せるとその場にいた木場や朱乃、塔条なんかも背中から羽根を出し、一誠に見せていた

「そ、そんなみんな悪魔だなんて……う、嘘だ……」

一誠が「嘘だ!」と言った瞬間一誠の背中からも黒い羽根が飛び出した

「これが証拠よ。わかってくれたかしら?」

「まだ頭の中がパニックってますけど、自分に羽根があるのを見て死んだことは理解しました」

「そう、理解してくれてよかったわ」

「そして、レオ貴方には提案があるの」

「ほう、提案とはな。なんだ言ってみろ」

「貴方、私の眷属にならないかしら?」

「!?!」

リアスの発言に対し、サーシャは驚きのあまり〈破滅の魔眼〉を発動してしまい部屋内にあった花瓶や壁を壊し、ミーシャはただ単に驚いていただけだった

「で、どうするの?」

「俺たちにメリットがないとも思うだが?逆にメリットがあるのはお前の方だと思うんだが?例えば、焼き鳥戦とかな」

「!?なんでそのことを知ってるのよ!」

麗央の発言にリアスと朱乃先輩は、驚いていたが他の部員はなんの
ことかさっぱりわかかっていないようだった

「まあ、眷属になってやってもいいがな」

「そ、そうならこれからもよろしくね」

「ああ、だが俺の仲間は12人いてな眷属にするのは俺だけにしてく
れ」

「わかったわ」

「じゃあ、貴方にはジャックの駒をあげるわ」

「よかろう、その役引き受けよう」

トントン拍子に話が進んでいるが、サーシャとミーシャは全く驚か
ず、麗央の意図を正確に理解していた

普通誰かの眷属のなると、眷属を辞めることはできないが2つだけ
辞められる方法がある。

1つ目は、自分が上級悪魔になり悪魔の駒（イーヴィル・ピース）を
もらうこと。2つ目は、王（キング）が死ぬこと。

アノスの算段では、今は眷属でいるがいずれは上級悪魔になり悪魔
の駒（イーヴィル・ピース）を使ってグレモリー眷属ごと自分の眷属
に加えようとしているのだ

そんなことを麗央が考えていることをリアスは理解しないで、麗央
を眷属に加えたのだった

この選択がとんでもないことになるのとは当分後のことだ
が・・・

新しい仲間

リアス・グレモリーの眷属になってから一夜が経った今日、俺は学校をサボリ街をブラブラとしていた

ちなみにサーシャとミーシャはちゃんと休まずに登校している

なぜ、俺が今日学校をサボったのかという俺たちと同じ転生者を探すためだ

今、一番会いたいのはシン||レグリアとアルトリア・ペンドラゴン、ジャンヌ・ダルクだ

「(あやつらに会えるといいんだがな・・・)」

そんなことを考えながら歩いていると近くから可愛らしい声が聞こえて来た

「はうう・・・どうして転んでしまうのでしょうか・・・」

声のした方に向かってみると、そこには見た目小学生の高学年みtainな背丈に金色の髪をしていたシスターが転んでいた

「大丈夫か？」

俺は、近くに落ちていたシスターベールを差し出しながら彼女に声をかけた

「だ、大丈夫です！あ、ありがとうございます。」

「礼は、いらぬ。当たり前のことをしたまでだ」

「でも、本当にありがとうございます。あ、あの名前はなんていうんですか？」

「俺の名は、暁麗央だ。」

「麗央様、ありがとうございます。あ、申し遅れました。私はアーシ

ア・アルジエントと言います」

「アーシアとはいい名前だな。それで、シスターアーシアは、ここで何をしていたのだ？」

「実は私、今日からこの街の教会に赴任することになったのですが、道が分からず迷子になってしまつて・・・」

アーシアは、顔を赤くしながら俺に現状を話してくれた

「なら、教会の前まで案内してやろう」

「え？でも、そこまでは悪いですよ・・・」

「気にするな。それにこの地域に教会と言つたらーっしかない」

「あ、ありがとうございます。日本に来て初めて会った人が麗央さんみたいな人で良かったです」

アーシアに感謝を述べられたあと、教会の近くまで歩いていくと、急に背中に悪寒が走り出した

悪寒を感じた麗央は教会の前まではいかず、その少し前で足を止めた

「あとは、このまま真っすぐ進めば教会に着くぞ」

「ありがとうございます。良かったらお礼をさせてください」

「悪いが今日は予定があるのだ」

「そうでしたか、ではまた今度お礼をさせていただきますいね♪約束ですよ！」

「ああ、その時は頼むぞ」

そう言つて麗央とアーシアは、別れることになった

そして、麗央は街に戻り本来の目的を果たすことにした

町に戻ると時刻は正午になろうとしていたにも関わらず先程よりも人の数が増えていた

(この人込みじゃあ探すのは困難であろうな・・・)

諦めかけていた時、人込みの中から明らかに違う雰囲気を出していた俺と同じぐらいの少年とサーシャと同じぐらいかそれより少し高めの金色の髪をした美少女2人が一緒にいるのを見つけた

確信はなかったが、多分シンⅡレグリアとアルトリア・ペンドラゴン、ジャンヌ・ダルクだろうと思いをかけてみることにした

「ちよつといいか」

「はい、なんでしよう」

答えてくれたのは、金髪の髪をショートカットにし、後ろ髪を1か所だけ長く編み込みにしている彼女だった

「聞きたいのだが、お前は聖処女ジャンヌ・ダルクか？」

「!?!?」

「どこでその名前を？」

彼女たちは、驚きを隠せないでいたが、どうやら間違っていないようだ

「宝具我が神はここにありて（リユミノジテ・エテルネツル）。これに聞き覚えあるだろうか？」

「それは私の宝具名・・・何で知っているのですか？」

「まあ、あとで説明するから落ち着け。で、そっちがアーサー王のアルトリア・ペンドラゴンと俺の右腕だったシンⅡレグリアだな？」

「!?!?」

「話があるついていら」

「「・・・」」

アノスは3人を連れて自分の家に向かって歩き始めた
その間、会話もなにもなく終始静かだった

(今にも、後ろの2人は襲いかかってきそうだな・・・一応、いつでも
戦えるように準備はしとくか)

「着いたぞ。ここだ」

数分歩いて着いたのは、自分の家だった

3人は家の前に着くと警戒心をさらに高めていた

「ここは、俺の家だ。外で話すのもアレだろうと思い連れて来た」

「なんか男の人の家入ったことないから緊張します」

「(よく、知らない奴と話せるな・・・彼女には警戒心というのがない
のか?)」

後ろの2人からは警戒心がピンピン感じるが、ジャンヌ・ダルクか
らはなにも感じぬ

彼女には、警戒心というのがないのか・・・?

麗央もアルトリアやシンと同じことを思っていた

とりあえず後ろで警戒している2人をどうにかせねばならぬな・・・

「安心しろ、2人とも。別に襲いはせん。ただ話をするだけだ」

「わかった。ただし、変なことをしたら即殺すからな!!」

「わかったそれでいい」

口を開いたのはアーサー王ことアルトリア・ペンドラゴンだった
家に入ると3人をリビングに通すことにした

「まあ、ギチギチしていたら話にならん。ここで休んでろ」

「貴方は？」

「俺は汗を掻いたから着替えてくる」

俺は、3人を席に座らせ飲み物を出し自室に向かった

麗央がリビングを抜け暫くすると3人が話し合いをしていた

「なあ、ジャンヌお前には警戒心というのが無いのか？」

「警戒心？あるわよ。でもなぜシン？」

「だって先程彼と・・・」だって、さっきからあいつと言葉を交わしていたじゃない！」

シンが話そうとするとアルトリアが話を割って入ってきた
すると、ジャンヌが優しく言葉を発した

「だって、アルトリアみたいにピリピリしていても有意義な話し合いはできないでしょ？だからって警戒心を捨てろってわけじゃないわよ？私だっていつでも宝具使えるようにしてるし・・・彼も戦う気はないみたいだし・・・もし、私たち3人で彼に挑んでも勝てないわよ？」

「そ、そんなことあるか！」

「やめろ、アルトリア。ジャンヌの言ってることは事実だ。私たちがは彼に負ける。それに殺す気なら殺すタイミングは幾らでもあった。本当なら俺たちは死んでいたんだぞ？それでも、生きてるってことは殺す気がないといってるのと同義だ」

「わかったよ。2人の言うことを信じてもう少し態度を柔らかくするわよ」

「わかってくれてよかったです」

数分して麗央がリビングに戻ると先程みたいな険悪な雰囲気ではなく、ほんわかとした雰囲気になっていた

「待たせたな。なんか空気変わったか？」

「そんなに待ってませんよ。新鮮な空気になっただけですよ」

「そうか。なら、話をしようか」

「……………」

「まず、俺が何者なのかということだが俺の名は暁麗央、転生者だ。質問はまとめて聞くからまずは聞け。俺は転生する前ジャンヌ・ダルクとアルトリア・ペンドラゴンのマスターになることを望んだ。その際、時間神クロノスによってマスターになった。だから、俺がお前たちの名と宝具を知っている。それと、シン||レグリアに関してだが、お前は俺が転生する前俺の右腕だったんだ。剣の達人としてな。そして、俺が転生する際に一緒に転生させたんだ。それがあいつが望んでいたことだからな。その証拠がこれだ……」

そう言っつて麗央は記憶を3人に見せた

すると3人は言葉を発するわけでもなく黙ってみていた

「どうやら彼が言ってるのは本当みたいだな。わかった言ってることを信じよう。俺はあんたに忠誠を尽くす。」

「そうか、わかってくれてなによりだ」

「私たちも信じたいですが、その前にマスターとなったからには手の甲に模様があるはずですよ。見せてくれませんか？」

「これだろ？」

ジャンヌがマスターの証を見せて欲しいと言ってきたから、麗央は模様を見せることにした

その模様を見たジャンヌは納得したようだった

「どうやら、彼は本当に私たちのマスターみたいよアルトリア」

「な……………んだと？本当か？」

「ええ、本当よ。疑うんなら見てみなさいよ」

「ほ、ほんとだ……………」

アルトリアが疑心暗鬼で麗央の手の甲を見てみると、その甲にあった模様が本物だったらしく彼女は驚いていたが納得したようだ

「本物だった。しかし、なぜ私たちのマスターになったんだ？」

「それは、お前たちがサーヴァントとして優秀だからだ」

優秀という言葉聞いてジャンヌとアルトリアは頬を赤くしていた

「さて、話は終わったがお前たち住む場所はあるのか？」

「それがですね、今その住む場所を探しているのですよ」

「なら、ここに住むといい。ここなら部屋は余っているし、余分な費用を使わなくてもいいぞ。どうだ？」

「私は、是非お願いしたいですけど、2人がなんていうか・・・」

「俺は別に構わないぞ。その方がありがたい」

「私もマスターと一緒にの方がなにかと楽だからな」

「じゃあ、レオお願いできるかしら？」

「ああ」

（先程まで警戒心丸出しで今にも襲い掛かってきそうなアルトリアがここまで丸くなるとは意外だな・・・）

それからというものの、4人は転生する前の話やここにきてどんなことをしていたのかなどと言ったことを楽し気に話していた

「時間が経つのははやいな・・・そろそろサーシャたちが帰って来る時間か」

麗央が呟くと時刻は既に午後4時を少し過ぎていた

すると、玄関が開き「ただいま」というサーシャの声が聞こえて来

た

その後ろからミーシャも「・・・ただいま」と言って入って来た

「レオ、誰が来たんですか？」

「・・・」

気になったのか、ジャンヌがリビングから顔を覗かせていた

サーシャとミーシャは、彼女が誰か分からず固まっていた

「まあ、とりあえず説明するから入れ」

そういうと、サーシャとミーシャは不服そうにリビングに入っていった

リビングに入るとジャンヌ、シン、アルトリアがサーシャとミーシャを観ていた

「この姉妹は俺の仲間だ。金髪のポニーテールに赤紫色の目をしている方が姉のサーシャ・ネクロン、銀髪の髪 of 両端にひし形の髪飾りをし碧い目をしている方が妹のミーシャ・ネクロンだ」

「サーシャ・ネクロンよ。よろしく」

「・・・ミーシャ・ネクロン。よろしく・・・」

「私は、ジャンヌ・ダルクです。よろしくね」

「俺は、シンIIレグリアだ。よろしく頼むぜ」

「私は、アルトリア・ペンドラゴン。君たちにわかりやすく言うんならアーサー王だ」

「アーサー王ってあのアーサー王よね？で、こっちはあのジャンヌ・ダルク!？」

ミーシャは、いつもながら無表情でわからぬが、サーシャは歴史上の人物にあつて驚いていた

サーシャが驚きから回復するのに5分もかかっていた・・・

さすがにこれは回復魔法であつてもなんともならぬ・・・

サーシャが回復すると制服のままキッチンに行き、夕飯の準備を始めた

「今日の夕飯は、肉じゃがよ！」とリビングにいる麗央達に聞こえるように言い、ミーシャと一緒に歌を歌いながら調理していた

暫くすると、料理が完成してきた

サーシャがさらに装い、ミーシャが皿をテーブルに出していた
その匂いにつられて、2階からジャンヌやシン、アルトリアが降りて来た

「美味しそうな、料理ですね♪」

「確かに美味しそうね」

「これは旨そうだな。期待できるぜ」

「当たり前でしょ！私が作ったんだから！」

皿を並べ終わり、面々が席に座ると食事前の挨拶をしてみんなで食事をしていた

「サーシャの作るものはどれも美味しいな」

「はい、サーシャのご飯美味しいです」

「・・・ん、美味しい」

今日の出来事や学校での話をしていると夕飯はすぐに終わってしまい、各々食器を下げていた

ちなみに、居候させてもらうからということ洗うのがジャンヌであり、拭くのがミーシャである

夕飯を食べ終わり、リビングでくつろいでいると床に魔法陣が描かれ始めた

その魔法陣には見覚えがあり、誰が来るのかすぐに理解した

「レオいる？」

魔法陣から思っていた人が慌てた様子で出て来た

ジャンヌやシン、アルトリアは警戒をし戦う準備をしていた
それをアノスは手を上げ制止していた

(いや、家の中で戦わないで欲しいんだが……住む場所なくなるぞ?)

「リアス、どうしたんだ? そんなに慌てて」

「それがね、祓魔師(エクソシスト)がでたのよ! 私以外は瀕死の重体なのよなのよ。助けてちょうだい!」

「なら、なぜ初めから俺を呼ばない?」

「なんとかなると思ったのよ!」

なぜこうなったのかという謎と遡ること十数時間前――

麗央が学校をサボり街中をウロウロしてシンやアルトリア、ジャンヌを探しているときにアーシア・アルジェントと出会い、迷子になっている彼女を教会まで送ったときその協会内ではレイナーレ率いる数名の墮天使と祓魔師(エクソシスト)がなにやら計画を企てていた。その墮天使の中には、先日麗央に殺されそうになったレイナーレを助けに来たドーナシークの姿もあった。端正な顔立ちで白髪頭で長めのコートを着ている青年の名は、フリード・アルゼン。彼の計画は悪魔を呼ぼうとした人間を次々に殺し、快楽を得ること。

レイナーレ率いる数名の墮天使の目的は、アーシアが持つ聖母の微笑み(トワイライト・ヒーリング)を奪い高位の地位につくことだった。

この2つの計画は別々に決行されるため、今夜決行されるのがフリード・アルゼンの計画で後日決行されるのが墮天使たちの計画であ

る。本来ならお互いにメリットのない計画に協力しないが、この2つの計画を遂行するには1人では成し遂げることができないため仕方なく協力しているといった形になっている。

こんな計画が企てられているとは知らない悪魔側は、夜まで何の手も打たずに過ごしていた。そして、夜になり上から計画を阻止し祓魔師を討伐せよという命令を受けたオカルト研究部が討伐任務に向かい、敵と遭遇し討伐しようとしたが、相手が手強くなかなか討伐することができず、結果リアス以外の眷属は瀕死の状態に陥ってしまったのだ。

リアスの言葉を聞いた麗央は呆れ顔をしながら、席を立ち上がった

「どこに行くのよ・・・」

サーシャが急に席を立ち上がった理由がわからず、どこに行くのか聞いてきた

「リアス・グレモリーの眷属を助けに行く。俺もこいつらの眷属だからな。しかし、お前たちは違うんだから来なくてもいいぞ?」

「私も行くわよ。魔王様1人で行かせるわけにはいかないもの・・・」

「・・・サーシャが行くなら私も行く・・・」

「私たちはサーヴァントですので、マスターの傍にいないとマズイですからね」

「俺は、あんたに忠誠を尽くしちまったし、行くしかないだろう?」

麗央が1人で行くこうとすると、サーシャやミーシャ、ジャンヌやアルトリア、シンが共に行くことを決意していた

「わかった。ただし、勝手に死ぬのは許さんぞ」

「二「はい!!」」

「じゃあ、行くぞ。リアスは俺の魔法陣に乗れ」

「わかったわ」

リアスたち一行がアノスの魔法陣に乗ると、突然目の前が真っ白になり、次の瞬間には先程まで戦闘をしていた廃屋の前にいた

「すごい、ありさまだわ」

「ん、廃屋が半分しかない・・・」

サーシャとミーシャの言う通り、着いた場所は半壊した廃屋の前だった。その周りの木々はなぎ倒され、地面には、幾つかの亀裂が入っていた

「私の眷属はどこ？」

「あそこ・・・」

リアスが自分の眷属をキョロキョロして探していると、ミーシャが眷属たちが倒れている場所を見つけ、指を指しながら言った

「みんな！大丈夫？」

「ぶ、部長・・・俺た・・・ちは：平気です・・・だから泣・・・かないで・・・」

リアスの声掛けに一誠が最後の力を振り絞ったかのような声でリアスに言ったあと、気を失った

リアスは一誠の声を聞くと、その場に座り込み泣きじゃくっていた（戦場なのによく泣けるな）

麗央が非情なことを思っていると、先程まで泣いていたリアスが泣き止みこちらを見て来た

「レオ、なんとかならない？」

「結果からいうと、こいつらは助かる。が、すぐに目は覚まさないだろう。暫くの間休息が必要だ」

「よかった・・・ええ、それでいいわ。直してちょうだい」

「総魔完全治癒（エイ・シエイル）。これで完全に傷は治った。あとは、寝かしておくことだな」

「ありがとう、アノス。本当にありがとう」

「礼などいらぬ。あとは、あれをどうにか討伐せねばな」

麗央は瓦礫に座っているフリード・アルゼンに目を向けた

「リアス、お前はそこでそいつらを守れ。あいつは俺がなんとかする」

「私も、戦うわ！」

「馬鹿者が！一斉に戦かったら誰がこやつらを守る！守るやつがいなければ巻き払いを喰らって今度こそ完全に消えるぞ！」

「・・・そうね、私の考えが浅はかだったわ。許してちょうだい・・・」
「それにあいつは強い。」

麗央は共に戦おうとしたリアスに怒気を含んだ声で怒鳴り散らし、異空間から斬月とは違う刀を取り出した。

その刀は、普通の刀より少し長く斬月と違いちゃんと柄や鞘・鍔・刀身があるのだ。

その斬魄刀の名は、氷輪丸。氷雪系最強と言われる斬魄刀だ

リアスは一瞬キョトンとしたが、麗央に言われたことで我に返ったようだ

「やっと、話が終わりましたかね〜人が話し終わるのをじっと待つのも退屈でつまらなかつたんですよ、ね!!」

フリードは言い終わる前に、目に見えない早さで麗央に切りかかってきた

しかし、麗央はいともたやすく氷輪丸で受け止め、衝撃を後ろに流していた

「なかなかやるではないか」

「お前もな！まさか、あれを防がれるとは思ってもいかなかったですよ」

その姿を見た、シンも異次元から一意剣シグシエスタを取り出し、アルトリアとジャンヌは戦闘服に着替え、エクスカリバーと戦旗を手にしていた。さらに、ジャンヌは腰に剣も付けていた

サーシャは、破滅の魔眼を出しミーシャは一体に結界を張り、その後創造建築（アイリス）によって大きな魔王城を建築した

魔王城を建てると麗央は軍勢魔法 魔王軍（ガイズ）を使い、サーシャとミーシャ2人の魔法線を繋げお互いの魔力を補充できるようにしていた

「まだまだあああああ!!」

フリードは連撃のラツシユで麗央との間合いを詰め攻撃してくるが、麗央はそれをなんなく躲し後ろに飛び退いた

飛び退くと、ある魔法陣を展開していた

「起源魔法 獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）」

麗央が起源魔法 獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）を展開すると、目の前に魔力をギュツと凝縮したような濃密な赤黒い太陽が数百、数千と展開され凄まじい熱を帯びていた

そして、麗央が手を上から下に降ろすと赤黒い太陽は一斉にフリードに向かって凄まじい速さで飛んで行った

「ちよ、マジで言ってるんですか！こんな喰らったら一瞬で死にますって!!」

「なら、全て避ければいいだけの話だぞ」

フリードは自分に向かってきた獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）を避けようとするが数が数なだけに全て避けきれずに幾つかが手や足、剣に当たり所々焼け落ち剣は完全に後かともなく消え去っていた

「もう、諦めて捕まったらどうだ？お前の負けだぞ、フリード」
「生憎、諦めるわけにはいかないんだよ！」

その戦いを見ていたリアスは足をガクガク震わせながらなんとか立っていた

「なんのよ、アレ……あんな濃密で濃い魔力弾は見たことないわよ……それに数もなん十個とかじゃなくて数百、数千つて……規格外だわ……」

麗央の初めての戦い方を見たりアスたちは彼の凄さに恐れ慄いていた。

一方、サーシャやミーシャは見慣れたといった感じで、溜め息を溢し、戦闘態勢を解除していた

シンやジャンヌ、アルトリアはポカンとしていた

「なんだよ、あの強さ……こんなの聞いてないぞ」

「これ、私たち武装する意味あったのかな……」

「なかったわね……でも、一応警戒はしときましょう」

「「そうね……（そうだな……）」」

武装した意味があるのかアルトリアたちが考えていると横からサーシャが口を挟んできた

「でもね、アレまだ全力じゃないわよ。たぶん1割ぐらの力よ」

「マジかよ……あれで全力じゃなくて1割かよ……じゃあ、全力出したらどうなるんだ？」

「転生する前に全力を出したアノスを一回見たことあるけど、大きな国を一瞬で2つ地図上から消し去ってたわ。転生前でそれだったんだから、アノス記憶を全て引き継いでいる麗央でも同じようなことできるんじゃないかしら？」

「……」

「マジかよ……あいつ、恐ろしいやつだな……」

サーシャの何気ない一言でシンは苦笑いをし、ジャンヌとアルトリアは何も発することができなかった

そんなことを話しているとフリードが失った片足で立ち上がり、麗央に向かおうとしたときだった

「そこまでだ、フリード！」

「!?旦那……」

フリードが旦那と呼ぶ彼は、空から漆黒の羽根を4枚つけ長めのロングコートに帽子を深く被った長身の男だった

(確か、あいつはレイナーレを消そうとしたときに出て来たやつだな)

「また、邪魔をしにきたのか？ドーナシック」

「ほう、私の名前を覚えていたのだね、若き悪魔よ」

「2回も邪魔されれば嫌でも覚えている」

「で、なに用だ？」

「……悪いが今回も邪魔させてもらうよ？こやつはまだ計画に必要なからね」

そう言いながらドーナシックは前回同様、懐から目くらましを投げつけ、その煙が消えた時には既に姿を消していた

「逃げたか・・・逃げ足が速いやつめ・・・」

「麗央、ご苦労さま」

「・・・麗央、よく頑張った」

「よくぞ、ご無事で！」

「マスター、強いんですね」

「あんた、凄かったぜ！」

　　労いの言葉をかけられていると、眷属たちを起こすわけでもなく近づいてきた

「レオ、今回はなんの相談もなく勝手に行動して申し訳なかったわ。それと、私の眷属を助けてくれてありがとう」

「気にするな。死んだら後味が悪くなるから助けただけだ。それと、次回から何か行動するんなら俺かサーシャたちに一声かけてからにしる。次、勝手に行動したら助けないからな」

「わかったわ」

「じゃあ、俺たちは帰るぞ」

　　仲間たちに一声かけ、足元に転移（ガトム）の魔法陣を描き、その場を去って行った

　　家に帰ると、時刻は既に午後9時を過ぎていた

「やっと、帰ってこれたわ〜長かった〜」

　　帰ってきて早々ソファでぐったりしていたのは意外にもサーシャだった

「妹のミーシャは、平気だというのにだらしないな」

「な、なによ・・・あの場にいるだけでも大変だったのよ？」

「さて、俺は風呂に行くがサーシャ詫びとして一緒に入るか？」

「いいわよ／＼／＼」

「ミーシャやお前たちはどうする？この家の風呂は広いから全員入っても余裕だぞ」

「私とアルトリアは、あとで入りますから大丈夫です」

「俺もあとで一人で入りたてえな」

「ミーシャは、どうする？」

「私も一緒に入る」

「そうか、なら先に脱衣所に行ってるぞ」

「ん（／＼／＼）」

一言だけ言い残し麗央はリビングをあとにし脱衣所に向かい、サーシャとミーシャは自室に着替えを取りに行った

一足先に脱衣所に着いた麗央は、足元に浄化魔法をかけ今日来ていた服を綺麗にし、下着だけをカゴに入れ入室した

それから、背中を軽く流し湯舟に浸かっていた

すると、急に風呂場の扉が開いた

そこから入って来たのは、前を何も隠さない生まれたばかりの姿で入ってきたサーシャとミーシャだった

なにも隠さず入って来たため、健全な男子が見れば興奮して前屈みになっているだろう・・・

「そんなに、見ないでくれるかしら？／＼／＼恥ずかしいんだから・・・」

「いやなに、2人とも綺麗な体だなと思ってな」

「／＼／＼／＼」

「ま、まあ、麗央になら見られてもいいわ！／＼」

「・・・ん、麗央になら見られても平気」

「そうか、それはありがたいな」

「だって、転生する前は私たち何回も体を重ねたわけだし／＼／＼（こ

の話の詳細は割愛させて頂きました。）

サーシャが麗央に寄りかかりながら、転生する前のことを思い出て顔を赤く染めていた

ミーシャはというと、普段と同じく無表情だが湯につかっているからなのか少しばかり顔を赤らめていた

それからというもの、お互いに洗いっこしたりして風呂を上がった

「出たぞ、次良いぞ」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「アルトリア、次行こうよ」

「そうね、シン悪いけど先にお風呂もらうわね」

「どうぞ、ごゆっくり」

そう言つて次にリビングをあとにしたのは、ジャンヌとアルトリアだった

シンは、なにしているのかというソファに座り携帯でゲームをしていた

結局、全員が入り終わったのは午後10時前だった

「今日は、もう遅いから寝るか。お前たち、俺は寝る。また明日な」

「はい！おやすみなさい」

「おやすみ」

「おやすみなさい、マスター」

「また明日ね、アノス」

「アノス、おやすみ・・・」

自室に戻り、ベッドに寝転がると布団をかけずにすぐに寝てしまった

「翌日」

〈チユンチユン♪チユンチユン♪〉

時刻は、現在7時。

窓から一筋の光が入ってきて麗央は目を覚ました

身体を起こそうとすると、なにかに押さえつけられている感じがし、横を見るとサーシャとミーシャが両腕を抱き枕にして寝ていた

「なるほど、昨日俺が寝たあと夜這いしてきたのか」

「・・・zzzz」

「俺の気も知れないで・・・」

麗央が呟くと2人は基礎正しい寝息を立て、まだ寝ていた

「だがしかし、2人の寝顔は本当に可愛らしい」

横で寝ている2人の寝顔が可愛いと思った麗央は、魔法で近くにあった携帯を引っ張り、2人の寝顔を写真に収めそのままロック画面の背景にした

もう少し見ていたい麗央だったが、時間も時間なためサーシャとミーシャを起こすことにした

「2人とも、起きろ。遅刻するぞ」

「・・・ん・・・麗央？」

最初に目を開けたのがミーシャだった

「おはよう、ミーシャ」

「おはよう、麗央・・・」
「サーシャ、起きて・・・」

ミーシャがサーシャを起こすと、「んツ」と嘆声を漏らしながら目を開けた

「魔王様?・・・なんで?」

「おはよう、サーシャ」

「麗央、おはよう。!?れ、麗央!?!」

「そうだが、なにをそんなに驚く?早くしないと遅刻するぞ」

なぜだかわからないが、サーシャは顔を赤くしていた

サーシャとミーシャを起こし、両手が自由になった麗央はベッドから起き上がり、そのまま部屋を出てリビングに向かって行った

「私たち、麗央に襲われてないわよね?／／／」

「・・・ん、大丈夫。麗央は襲ったりしない。するにしても、ちゃんと聞く」

「そ、そうよね・・・なら、よかったわ」

「でも、麗央になら別に奪われてもいいわ・・・／／／」

「・・・私も・・・麗央にならない・・・」

麗央がいなくなり部屋にはネクロン姉妹が残っていたが、サーシャの思いがけない?襲われてないわよね”という言葉でミーシャは、驚きはしたがすぐにサーシャが言ったことを理解し顔を赤らめていた
その表情は、この姉は急になにを言い出すんだと言った顔をしていた

「私たちも早く下に行かないと!」

「・・・ん・・・ご飯、食べ損ねる・・・」

2人は、足元に魔法陣を書き素早く制服に着替え部屋を出て行ったリビングに着くと、そこには朝食を皿に盛っているジャンヌとアルトリア、それを運ぶ麗央とシンの姿があった

「おはよう」

「・・・おはよう」

「おはようございますー!」

「おはよう」

「おは〜」

「2人とも遅いではないか」

サーシャとミーシャが挨拶をするとジャンヌ、アルトリア、シン、アノスが順に挨拶を返してきた

麗央たちを手伝おうとすると麗央によって止められてしまった

「もうすぐ終わる。2人は黙って座っている」

「そうですよ、ここは私たちに任せてください!」

アノスに席に着いているように言われたが、どうしようか悩んでいるとジャンヌが横から口を挟んできた

サーシャとミーシャは、ジャンヌの勢いに押され仕方なく席に着いた

それから暫く席に座り待っていると、料理が並べ終わり麗央やシン、アルトリア、ジャンヌが席に着き全員で朝食を食べることにした

「今日の朝ごはんも美味しいわ。これは、負けてられないわね!」

「大丈夫・・・サーシャのご飯も美味しい・・・麗央も喜んでくれる」

「ミーシャ!? な、なにを言ってるのよー!」

サーシャは、照れを隠すかのようにミーシャの頬を目を瞑りながら

抓っていた

ミーシヤは口に食べ物を入れてはいるが、それが嚙むことも飲み込むこともできずにいるため頬がリスみたいに膨れていた。正直、可愛かった

「その顔も可愛らしくていいが、サーシヤいい加減ミーシヤを離してやれ。苦しそうだぞ」

麗央が助け船を出すと、サーシヤはミーシヤを見た

その瞬間、彼女の顔は絶望したかのような顔をしていた

ミーシヤの目は涙目になっており、今でも意識を失いかけていた

「!?ミーシヤ、しっかりして!」

サーシヤは慌ててミーシヤを抓るのを止めた

抓るのを止めたことでミーシヤは口の中にあつたものをやつと飲み込むことができた

「ミーシヤ、ごめんね・・・大丈夫?」

「大丈夫・・・そんな顔しないで・・・」

「ミーシヤ!」

サーシヤはミーシヤに抱き着いて涙を啜っていた

この光景を見ていたシン、アルトリア、ジャンヌの3人はこの状況をどうしたらいいのかわからず固まっていた

ちなみに、麗央は（自分がしたことだろうに・・・）と思いながら普通に朝食を食べていた

朝から一悶着あつたが、あれ以降サーシヤとミーシヤは仲良く話をしながら朝食を食べていた

結局、全員が朝食を食べ終えたのは食べ始めてから30分ぐらい

経ったあとだった

全員が食べ終わると、サーシャとミーシャ、麗央は部屋に戻り今日持っていく教科書の準備を、ジャンヌは洗濯物を、アルトリアは洗い物を、シンは音楽を聴きながら掃除機を、各々やることをしていた準備が終わった3人は、家を出て現在登校中だった

数十分すると、3人は学校に着いた

そのまま昇降口で靴を履き替え、クラスに行くとなにやら騒がしかった

それも、麗央の席にだけやたらと人が集まった状態で・・・

その人込みを避け進んでいくと、そこに座っていたのはリアス・グレモリーだった

なるほど、この人ばかりはリアスを一目見ようとして集まって来たというわけだな

はた迷惑な話だな・・・

「それで、俺になんの用だ？」

「今日の放課後、空いてるかしら？」

「空いてはいるが、それがどうした」

「なら、放課後デートしましょ」

リアスの突然の言葉を聞き周りの生徒はかなり驚いた様子だった

『きやああああああーデートだって！もしかして、2人は付き合ってるのかな？』

『学園一のお姉さまと付き合ってるなんて！』

『お似合いです！お二人とも！』

周りの生徒は黄色い歓声を上げていたが、麗央やサーシャ、ミー

シヤはその言葉の意味をそのまま受け取らなかった

(この言葉の裏には、なにかある) そう感じていた

しかし、このままでは話が進まないため話を合わせることにした

「いいだろう、行きたい場所を選んでおけ」

「わかったわ。放課後までには上げておくわ」

そう言い残し、彼女は教室を出て行った

その光景を隣の建物の屋上から見ている人物がいた

放課後になり、麗央はリアスから届いたメールをみるとオカルト研

究室に呼び出しを喰らっていた

そして、扉の前に着くと中からリアスたちとは別の誰かの気配を感じた

麗央は、そこにいる人物を良く知っていた・・・

なぜなら、転生する前にクロノスからもらった資料で見たから・・・

彼の名は、ライザー・フェニックス。麗央が最も嫌いなタイプのクズだ。

どうせ、流れる的にレーティング・ゲームをするんだからその時滅ぼすことを秘かに決めたのは、もう少し後の話

謝罪とご報告。

今回の投稿内容は、ストーリー編ではありません。

はじめに

いつも読んでくれていらっしゃる皆さん並びに応援コメントや毎回誤字脱字報告してくれる方々、こんな作者の自己満駄文に付き合ってください、ありがとうございます。

正直な話、あまり小説とかを書いたことがなくこんな感じで良いのかな？とか感情面をどうやって出さばいいのか手こずることもありましたが、なんとかやって感じて書き上げてます。なので、どうしても文章力や物語の展開の無茶なところもあるかと思えます。が、寛大なお心で読んで頂けると嬉しいです。

それで、今回ですが今回は主人公アノスのことについて少しだけ変更点があるので投稿しました。変更内容は以下の通りです。

このシリーズのアノスについてですが、読み返してみると所々アノス口調になっていなかったりしており、添削中に治そうかと思っただけですが、思っていたより訂正箇所が多くまたアノス口調が難しいため急遽設定を変えることになりましたが、4話目からは主人公をアノスからアノスの記憶を持ったオリ主に変更したいと思えます。

ですので、4話目から「主人公はアノス」タグを削除し、代わりにオリ主（男）を入れます。

ここまで読んでくださった皆様には申し訳ありませんが、勝手ながら変えさせて頂きます。

真に申し訳ありません。

それに伴い、家などもちよつと変更します。

オリ主のプロフィールは以下の通りです。

氏名 暁 麗央（あかつき れお）

歳 20

職業 自営業『Devil of EDEN(悪魔

たちの楽園)』店主(表向きは、何でも屋。しかし、裏では悪魔討伐や駒王町のパトロールなどをしている。リアスもこの店のことを容認しており、リアスたちが人間界にいないときなどは代わりに対応し、奇襲やトラブルなどがあつた場合要請されれば行くが、基本的に自分の店が危険であると判断しない限り動かない。(*麗央だけは、リアスの眷属であるため彼だけは別)。仕事場兼自宅でもある。

能力 ここに関しては、プロローグにも書いた通り、本来アノスが授かった力を麗央に転生するときには授かったものとしてそのまま使います。彼の仲間たちも関しましても特に帰ることはありません。強いて言えば、住んでいる所が違うくらいです。

くおわりにく

これが新しい設定となりますので、ゴチャゴチャにならないようにお願い申し上げます。

わからないことや疑問、矛盾している点がございましたら遠慮なくコメントかをください。

突然の変更、誠に申し訳ありませんでした。

麗央の怒り&意外な人物

放課後、メールでリアスに呼ばれたアノスたちは、オカルト研究部の前に着くと中から感じたことのない気配を2つ感じたが、すぐに誰のものなのか理解した―それは、ライザー・フェニックスとグレイファイアのものだった

だが、麗央たちは気にすることなく扉を開け、中に入っていた

「入るぞ」

「失礼するわよ」

「お邪魔します・・・」

中に入るとそこには、赤いスーツ姿で金髪の髪をし、いかにもホストでいそうな長身の男性とメイド姿の銀髪の女性がいた

その男は、リアスの隣に座り、手をリアスの肩に回し朱乃さんが入れてくれたお茶を飲み、女性はリアスの後ろに立っている

「いやぁーリアスのクイーンが入れてくれたお茶は美味しいものだな」

「それは、ありがとうございますわ」

朱乃の表情は終始笑顔だが、その笑顔からは怒りが感じられた

ただ、笑っているだけなのになぜ怒りを感じるのか・・・

「さて、今日、人間界に来たのはリアス、お前との縁談の話しようと思ってるな」

「?!?!」

ライザーから縁談という言葉聞いた一誠は驚いた顔をし、（こんなやつと部長が釣り合うわけがねえ!）と思っていた

しかし、リアスの次の言葉を聞いて一誠は、ホツとしていた

「何回も言わせないで！ライザー、私は貴方と結婚する気はないわ！」
「だがな、リアス。俺だつて家の看板背負つてんだ」

「それは、私も同じよ！でも、貴方とは結婚しないわ！お婿さんだつてとるわ！それに、私にだつて結婚相手を選ぶ権利くらいあるはずよ？自分が好きになつた人と結婚するわ！」

「リアス、いい加減にしろよ？俺が穩便に済まそうとしてるつていうのによ！」

先程まで温厚だつたライザーが話に進展がないことに苛立ち始め、手に魔力を集め始め、それをリアスに向かって放つた

「?!?!?!」
「?!?!?!」

周囲にいた眷属やグレイフィアは反応が一瞬遅れてしまった
だが、ライザーの表情はなにかに驚いているようだった

「?!?!?!」

「おい、焼き鳥野郎…今…俺のリアスに何しようとした…」

ライザーの魔力弾を扉の前にいたはずの麗央がいつの間にかリアスの前に立ち、魔力弾を片手で弾いていた

その光景に、ライザーは驚いていた

そして、魔力弾を弾いた麗央の体から黒い魔力が溢れていた

その瞬間、グレイフィアや両眷属は、麗央が放つ威圧感に押され動くことができなかつた。それは、リアスやライザーも同じだった…

唯一、動けたのはサーシャとミーシャだけだった

「聞いているのだ、答える。今、俺のリアスに何しようとした…」

「え…そ、その…魔力弾を…放ち…ました…」

「そうだな、じゃあ死ぬ覚悟はできると受け取らせてもらうぞ」

麗央はサラツとリアスを自分のモノみたいにしてはいるが、誰も何も言えなかった

当のリアスは、自分のモノと言われ頬を赤くしていたが・・・

「ま、待ってくれ・・・」

「待つわけねーだろ!!」

そう言うと、サーシャとミーシャはライザーに対して憐みの目を向けて、麗央は異空間収納から聖剣グラムを取り出しライザーに刃先を向けていた

「この剣はな、聖剣グラム。エクスカリバーより威力は劣るが、破壊力は抜群だぞ」

「せ、聖剣だ?!?なぜ、悪魔の貴様が聖剣を扱える?!?光は、悪魔にとって毒なはず・・・」

「なに簡単なことだ。大量の魔力を流して屈服させればいいだけだからな」

サラツと言っているが、そんなことができるのは一握りの者にしかできない。下手をすれば聖剣に自分の魔力を全て持っていかれ魔力欠乏症で倒れるか最悪の場合、死に至るかである。それだけ、魔力による剣の屈服は難しく、できる者が少ないのだ。それを麗央はさぞ当たり前のようにやってのけているのだ。

この時点で麗央がライザーより上の実力を兼ね備えていることがわかる。そのことを理解したライザーは麗央に恐怖し、少しづつ後退ることしかできなかった

だが、下がれば下がるほど麗央がどんどん距離を詰めてきていたが、突然背中になにかぶつかった気がした

振り向くと後ろにサーシャとミーシャが立っていた

前からは聖剣グラムを持った麗央が後ろにはサーシャとミーシャが立っており、まさに恐怖というには相応しい状況だった

「ま、待て！さっきのは、ほんの冗談だったんだ。脅すつもりだったんだ！」

「ミーシャ、どうだった」

「・・・悪意・・・殺意の塊だった」

「だそうだ。ミーシャはな、人の気持ちや感情には敏感でな見ることができるんだ」

「…ッ！」

ライザーはアノスに何を言ってももうダメだと思ったのか、今度は自分の眷属に視線を移した

眷属たちの大半は動かなかったが、唯一一人だけ声を上げながら棍を持った少女が麗央に突っ込んでいった

「はあああああああああ！」

「サーシャ」

「はいはい」

棍を構えながら突っ込んできた少女の前にサーシャが立ち右手に魔力を纏い、そのまま棍を持っている左手を手首で切断した

「あ”、あ”あ”あ” あああああ”

左手を手首から切断されたことで、床をゴロゴロ転がっていた

一方、サーシャは感情を顔に出すことなく床に転がっている少女を見下していた

数分経っても床で喚んでいる少女を視て目障りだと感じたのか転がっている少女の顔を踏み躪っていた

「あゝあああああゝ、手が手が・・・痛い・・・よ・・・」

「うるさいわね・・・麗央こいつ、どうするのよ?」

「そうだな・・・今すぐ楽にしてやってもいいが、それじゃつまらないからな・・・んゝ暫くそのままだな」

「わかったわ」

麗央たちは普通に会話をしていたが、この光景を見ていたリアスたちと残りのライザー眷属、グレイファイアは顔を青褪めさせ、ガタガタと震えていた

(レオ、怖ッ！絶対に怒らせたくないわ・・・ライザーとあの子に同情するわ)

(あれが暁麗央・・・とんでもない存在ですね・・・実際、どんな人物なのか気になってましたが、彼は危険人物かもしれないですね・・・私が戦っても勝てる気がしません・・・30分もかからずに決着が着くでしょう・・・)

(俺は、とんでもない奴を怒らせてしまった!このままでは、俺たちは全滅だ。なんとか、眷属たちだけでも助けてやらねば)

上からリアス、グレイファイア、ライザーがそう感じていた

暫く、沈黙が続き最初に破ったのはグレイファイアだった

「そ、そこまでです」

グレイファイアは震えている足を懸命に動かし、ライザーの前に立ち塞がった

「邪魔だ。どけ」

「どきません。私は、サーゼクス様のクイーンとしてここに来ています。ライザー様を殺すというのなら、まずは私を殺してから行きなさい」

「わかった。なら、まずお前から殺して次にその焼き鳥を殺す」
「!!?!」

麗央の発言を聞き、サーシャとミーシャ以外は再び驚き恐怖した。なぜなら、サーゼクス様と言えばリアスの兄で現・四大魔王の一人だ。そして、あそこに立って震えているグレイフィアは、そんな魔王のクイーンだ。実力的に言えばNO. 2だ。そのNO. 2を殺すと
言っているのだ

それは、誰でも恐怖し動こうとはしないだろう・

しかし、グレイフィアはそんな状況下でも冷静になり、無詠唱で反魔法を展開しようとしていた

「殺す」とわざわざ言っているのだから攻撃魔法より反魔法を張ってダメージを最小限に抑えた方が賢明だろうと判断したためだ

しかし、次の瞬間驚くべきことが起きた!

それは、反魔法を展開しきる前にグレイフィアの右肘から鮮血が溢れ出した

何事かと思い、自分の右肘を確認すると肘から先が斬り落とされていた

そのことに驚いたグレイフィアはメイドとしてでなく素の声が出てしまった

「い、いつのまに?!」

グレイフィアは、先程左手首を切られた棍の少女みたいに泣き喚めなかったが、苦痛の表情を浮かべいつ切られたのか考えていた

麗央は、グレイフィアの右肘を切り落とすと聖剣グラムを異空間収納にしまった

「気が変わった、今日は、このくらいにしといてやろう。だが、まだこ

の問題は終わってないはずだ。こういう場合は非公式のレーティング・ゲームで決着を決めるのだろうか?」

「え?ええ、そうですが・・・」

「なら、それでケリをつけるとするか。クツクツクク」

「わかりました。それでしたら、開催時刻と場所は後日お知らせします」

麗央は良い遊びを見つけたかのように笑っていた

「それと、焼き鳥。逃げないようにこれに調印しろ」

ライザーの前に現れたのは、白い円だった

その中には、城みたいな柄が書かれており、半分が赤くなっていた
ライザーには、見たことない魔法だったため恐る恐る聞いてみることにした

「こ、これは?」

「これは契約(ゼクト)と言ってな。簡単に言うと、契約だ。これを破ると破った方の根源、つまり心臓が止まるようになってる」
「.....」

ライザーが調印を躊躇っていると、悪魔の囁きが聞こえた

「まあ、別に調印せずともいいぞ。その際は、お前の家ごと潰すだけだ」
「?!?!」

その言葉を聞いたライザーは絶望に満ちた顔をし、仕方なく調印することにした

「そうか、調印したか」

「なら、これでリアス眷属対ライザー眷属とのレーティング・ゲームに

参加しなかったらお前の心臓止まるからな」

そう言い残し、麗央、サーシャ、ミーシャが扉に向かって歩いていこうとした時、なにかを忘れていたのか先程サーシャによって切断された手の前に行き、〈破滅の魔眼〉を使いその手を跡形もなく燃やし尽くした

その行動を見ていた、サーシャもその少女が持っていた棍を半分に踏み折った。

ミーシャは、近くに落ちていたグレイファイアの右手を鷲掴みにし麗央に届けていた

「・・・麗央、これ・・・」

「ん？ああ、悪いな。こんなグロイ物を持つてきてもらって」

「大丈夫・・・どうする？」

「そうだな、こいつのは俺が預かっておこう。それとそのメイドさんよ、あとで俺からお前さんに念話を飛ばすからその要望をちゃんどに伝えてくれよ？他言はゲームが始まるまで許さないぜ。他言したらもう片方の手も切り落とす」

そういいながら、麗央はグレイファイアの右手に凍結魔法をかけ、異空間に放り投げた

そして、そのまま部屋を出て行った

部屋に取り残されたメンバーは、やっと息を吸うことができたのか息を切らす者や床に座り込む者、部屋隅で吐く者、緊張がほぐれ失禁してしまう者までいた

「ライザー、貴方、なんてものを怒らせてるのよ・・・」

「そ、そうだな・・・すまなかった・・・あいつの殺気は尋常じゃなかった・・・本当に殺されるかと思った・・・」

「命拾いしたわね・・・グレイファイアは大丈夫？」

「ええ、腕を切られましたが大丈夫です。それにしても彼からの念話が気になります・・・」

「そうね。なんか私の眷属がごめなさいね」

「お嬢様、顔を上げてください。」

「ありがとう。でも、グレイフィア、麗央と戦うとなったら貴方勝てる自信あった？」

「ありません。私と彼が戦ったら私の勝率は0%です。30分もかからないうちに終わっていたでしょう・・・それに、彼の後ろにいた2人も相当の実力者ですよ。」

「そう、麗央たちだけは敵に回したくないわね」

「そうですね・・・私は、報告があるので、そろそろ失礼します」

グレイフィアは、リアスと少し話をして足元に魔法陣を書き、帰っていった

それと同時にライザーたちも負傷した眷属を連れ転移していった
残されたのは、リアスとその眷属だけだった

「なんていうか・・・息できなかつたな」

「そうだね、僕なんか彼の魔力に当てられすぎて頭が痛かったよ」

「あれは、一撃でも喰らったら消滅レベルの魔力でした・・・」

一誠と木場、塔条がアノスの魔力について語っていると、後ろからフラフラしながらリアスが近づいてきた

「と、とりあえず今日の部活は終了よ。帰りましょう」

「」「はい・・・」

部活が終わり、帰路に着こうとしていた一誠は今日の部室でのことを思い出し、すぐに家に帰る気にはならなかったため、少し寄り道をして帰ることにした

「はあああ……今日は散々な目にあつたぜ」

(本当だな……だが、相棒。麗央が解決してくれたじゃないか！アレを見て俺は満足したぞ)

「確かに、俺も満足したさ。でも、1つだけ満足してないんだよ」

(それは、なんだ)

「それは、俺は普段から皆を守る力がないことを実感しているんだ……転生してから間もないから仕方ないと言えはそうなのかもしれないけど、それで終わらせたくはない……俺は、その一点に満足してないんだ」

(なるほどな、確かにお前は今代最弱の赤龍帝だ。だが、逆に言えば伸びしろがあるということだ。なら、やることは1つだ。死ぬ気で努力して強敵との戦闘経験を詰め。それを繰り返せば相棒も強くなるさ)「そういうもんかな……なら俺h「きやああああああ」」

一誠が寄り道しながらドライブと話していると近くから女の人の叫び声が聞こえてきた

「今のは、悲鳴だよな」

(そうだな、悲鳴だな。相棒、行くのか?)

「当たり前だ。いくぞドライブ」

そう言い、一誠は悲鳴が聞こえた方向に駆けて行った

悲鳴が聞こえた場所に向かうと、そこには見覚えのある人物がいた

「レイナーレ……」

そこにいたのは、以前一誠を殺したレイナーレだった

しかし、以前会ったときはなにかが違っていた

すぐにはわからなかったが、暫くすると彼女の背中に羽根がないのがわかった

「お前、羽根は？」

「!!うるさいわね。あいつに切り取られたのよ！」

一誠がレイナーレの羽根について聞くと、逆上したかのように目の前にいた金髪の少女に向かって自分を殺した時と同じ光の槍を出し顔に突き付けていた

「やめろ、レイナーレ！その子を殺す気か！」

「うるさいわね、貴方には関係ないでしょ！邪魔するならまずは、貴方からよ」

レイナーレは、横から口を挟んできた一誠に先程の光の槍を向けていた

「でも、今回は貴方を殺しはしないわ。運がいいわね？今日は、このアーシアを連れ戻しに来たただだから貴方はそこで黙ってなさい」
「やめろーその子が何をしたっていうんだ！」

レイナーレは、一回は先程の光の槍をしまったが一誠が懲りずに口を再び挟んだことで光の槍を2本出し、一誠の太ももめがけて投げつけた

2本の槍は、一誠の太ももを貫通し、槍の半分が刺さっていた

「グガッツツ！」

一誠は顔に苦痛の表情をし、立っているのが精一杯だった

「いやああああああ！レイナー様、なにをするんですか！あの方がなにをしたって言うんですか！」

「アーシア、貴方が戻って来なければ彼を殺すわよ」

「?!?!?!わかりました。レイナー様の元に戻ります。ですので、彼は助けてください」

「いいわ。かわいい部下の願いだもの。聞いてあげる」

「やめろ、行くな！君は、そんな奴に着いて行っちゃダメだ」

「心配してください、ありがとうございます。でも、私は大丈夫ですから。貴方だけでも、生きて下さい」

そう言い残し、レイナーはアーシアを連れて時空に切り込みを入れ、その中に消えていった

それとすれ違い様に一誠の前に魔法陣が展開された

その魔法陣に見覚えがあった

なぜなら、その魔法陣は一誠の主リアス・グレモリーの魔法陣だからだ

「一誠！大丈夫？」

魔法陣からリアスと朱乃さんと小猫ちゃんが現れ、リアスは立ち尽くしている一誠に思いきり抱き着き涙を流していた

「ひどい傷だけど生きててよかったわ・・・ごめんさいね、気づけなくて・・・」

「部長はなにも悪くないですよ。俺が勝手に突っ走ったことなんですから」

「でも、本当に生きててくれてよかったですわね」

「・・・」

一誠は泣き続けている部長の頭を撫でるしかできなかった

それから暫くしてリアスが泣き止み、いつもの感じに戻った所でさつきの出来事を説明していた

「部長、俺、アーシアを助けたいです」

「一誠、それは無理よ。下手に動けば堕天使との全面戦争になるわ」

「でも、このままじゃアーシアは殺されてしまいます」

「無理なものは無理よ!」

「なら俺を眷属から外してください!」

「馬鹿なことを言わないで!そんなことできるわけないでしょ!」

「まあまあ、今日はここまでにしませう?一誠君も怪我を負って大変なんですし」

「そうね・・・」

リアスも自分が少し熱くなったのに反省し、そっぽを向き朱乃は持ってきた道具を使い一誠を治療していた

治療と言っても太ももに空いた穴を魔力で元に戻し、その後穴の開いていた場所を隠すように包帯で巻いただけなのだ・・・

ちなみに、小猫はあくびをして眠たそうにしていた

一誠の治療が終わると、リアスたちは魔法陣を足元に書き転移し、

一誠は何事もなかったかのように家に帰って行った

↳翌日↳

翌日になると、一誠は何事もなかったかのように普通に登校してきた

普通に登校してはきたが、昨日の傷が完治しておらず、両太ももに包帯を巻いているため歩き方がロボットが歩いているようにぎこちなかった

教室に入るとすぐにエロ仲間の元浜と松田に「エロの話をしよ
ぜ!!」と絡まれたが、今の一誠の頭の中はアーシアを助けることしか
ないため彼らに構っている余裕はなかった

「わりい、今日はそんな余裕ねえんだ」

エロの権化とも言える一誠が同じエロ仲間の誘いを断るとクラス
メイトが一斉に一誠の方を向いた

それもそうだ、なにせ普段からエロのことを昼夜問わず話していた
一誠が誘いを断ったのだから・・・

この光景にクラスメイトたちは驚きもしたが気持ち悪くも感じて
いた

一部の生徒からは、「明日、雪でも降るんじゃないかね?」という声も聞こ
えて来た

そんな心ここにあらずの状態で一日分の授業を受けていた

放課後になると、一誠はいつものようにオカルト研究部に足を運ん
でいた

そこには、既に一誠以外のメンバーが揃っていた

辺りを見渡すとある者は、お菓子を食べながら宿題をし、ある者は
紅茶を啜り、ある者は壁に寄りかかって目を瞑っていたりしている

すると普段一誠と滅多に話さないサーシャが一誠に声をかけてき
た

「ねえ貴方、昨日墮天使と遭遇したかしら?」

「え?」

一誠とリアス、朱乃、小猫は驚いていた

なにせ、昨日現場にいなかったはずのサーシャの口から墮天使とい
うワードが出て来たからだ

「え？じやなくて会ったかどうか聞いてるのよ」

「確かに昨日、会いました。でも、なぜです？」

「そう。それで墮天使に両太ももを槍で貫かれたというわけね」

「！！！！」

「またも4人は驚いた」

そのことを今日話そうとしていた4人は、またも現場にいなかったサーシャの口から一誠の今の状態を当てられたのだから

「た、確かに両太ももを貫かれました。でも、なぜサーシャさんにわかるんですか？」

「なんでって、貴方達4人から墮天使の残留魔力を感じるからよ。？特に、貴方からわね」

「な、なるほど・・・」

「ちなみに昨日の出来事、私たちも知ってたわよ」

一誠が自分が怪我をしている理由がなぜわかったのか理由を聞いて納得していると、サーシャから驚きの発言があった・・・

なぜなら、彼女たちは昨日一誠が襲われるのを知りながら助けなかったと言っているからだ

「待って！なんで知ってたのよ」

「なんでって、仲間に調べてもらったからよ？」

さすがにサーシャのこの言葉を聞きリアスも声を荒げ問いただした

「じゃあ、なんで一誠を助けなかったのよ！」

「私は貴方の眷属じゃないし、麗央の言うことしか聞かないわ。それに麗央は一応貴方の眷属だけど、なんでもかんでも麗央に頼ってたら意味ないでしょ？麗央に頼るのは、自分たちで努力したあとよ。違いかしら？」

「・・・」

サーシャの反論にリアスは、なにも返す言葉が見つからずそのまま黙って席に着いた

「それに彼女には両羽根がなかったでしょう？あれをやったのは麗央よ」

「!!」

その言葉に一誠は何度目かの驚きを見せた

当の麗央はミーシャと楽し気に話をしているため聞こえてないらしい

そこで一誠は妙案を思いついた

彼女らに討伐してもらえばいいのではないかと・・・

彼女らなら眷属じゃないからもし仮に殺してしまっても全面戦争は起きないだろうと考えたのだ

しかし、そこに1つ問題が生じる

それは、彼女たちがこの依頼を受けてもメリットが全くないことだ
なら、どうしようかと考えているとリアスがサーシャに質問をしていた

「さつき、仲間に調べてもらったと言ったわね。その情報のことを詳しく教えてくれないかしら？」

「いいわよ。今回の件は、首謀者の独断だということ。彼女の目的はアーシア・アルジェントの神器を奪い墮天使内での高位の地位につくこと。この2つが主な目的よ。ちなみに首謀者は、彼を殺したレイナーレよ」

サーシャは、調べてもらった情報を全部教えた

それを聞き、リアスはホツとしたような表情をしていた

「部長、これでアーシアを助けに行けますね」

「そうね！そうと決まれば、早速今夜救出に向かうわよ」

「二「はい！」」

「ちなみに場所はどこかしら？」

「古びた教会よ。この街に教会と言ったら1つしかないわよ」

「わかったわ、ありがとう。貴方って意外と優しいのね」

「何を言ってるのよ、私はいつでも優しいわよ」

「そう言い残すと彼女は急に恥ずかしくなったのか、そそくさとアノスたちのところに行ってしまった」

「彼女、意外とかわいい所もあるのですね♪」

「ええ、最近まで悪女だと思ってたけど違ったみたいね」

リアスと朱乃は、サーシャの背をみながら本人には聞こえない声でサーシャの評価を直していた

サーシャから情報を聞き出したリアスたちは古びた教会の前に来ていた

壁が所々崩れており、屋根の上に立っている教会のシンボルといえる十字架は半分欠けている状態だった

「ここね。中から墮天使の気配はするけど、あまり立ち寄りたくはないわね」

「そうですね、扉の前にいるだけで肌がビリビリしてきます」

「早く済ませて、帰った方がよさそうですね」

「なに、別に気にすることはあるまい」

「それは、貴方だけよ」

この地に転移してきたのは、リアス・木場・朱乃・麗央・小猫・一

誠・サーシャ& a m p ; ミーシャだ

要は、オカルト研究部の部員全員とプラス2人といった状況だ

「部長、作戦はどうするんですか？」

「そうね、私と朱乃は裏に回るわ。裕斗と一誠、小猫は正面から…
麗央達は、自由行動ってことで」

「わかった。なら好きにやらせてもらう」

「はい！」

作戦を伝えられたメンバーは各位置に着く行動をしていた

各位置に着くと、既に敵が待ち伏せをしていた

最初に敵と遭遇したのは、裏に回ったリアス& a m p ; 朱乃ペア
だった

「やっと、きたよ。来ないのかと思ったよ」

「左様、怖気づいて逃げたのかと思ったぞ」

「そういつてやるな。彼女らも勇気を振り絞って来たのだから」

目の前の墮天使たちは、リアスたちを嘲笑い完全に自分たちよりも
実力は下だと思いつ込んでいた

しかし、実のところリアスと朱乃の実力は目の前の墮天使たちより
遙かに上なのだ

彼らは、そのことを気づけないでいた

「別に怖気づいたわけじゃないわ！ただ、遅れただけよ」

「そうですね。あまり、私たちを甘く見ないことですよ」

「そうか、口では何とでもいえるからな。信じて欲しければ力で示せ」

その言葉を聞くとリアスは滅殺の魔力を使い魔弾を作り敵に飛ば
し、朱乃は後ろに控えていた墮天使2体に雷を落とし攻撃をしていた
後方に控えていた墮天使2人は自分たちの方が強いと思いつ込み、全

くと言っているほど警戒していなかったため朱乃の雷に気づかず塵尻にされていた

一方、リアスの相手をしている墮天使は相当の手練れのようで魔弾を放つては躲され、敵の攻撃を躲しの繰り返しが行われていた。その光景を見ていた朱乃は気配を消し、敵に気づかれないう背後を取って攻撃しようとしていた。肝心の2人は、自分たちの戦闘のことは頭になく朱乃がなにをしているのか眼中にもなかった。そのおかげで、朱乃は簡単に背後を取ることに成功し、雷を纏わせた手を心臓部分に刺し込み体内から燃やし尽くした。凄まじい雷を体内で直接感じた墮天使は、口や鼻、耳から煙を出し灰となって消えていった

「あっけなかったわね・・・」

「そうですね・・・今度はもうちよつと強い方とやりたいですね」

リアスと朱乃の戦闘が終わったころ、一誠たちはというと苦戦を強いられていた

なぜこうなっているのかというと、作戦が各自に伝えられた後一誠たちは扉を壊し中に侵入したのだが、目の前に見覚えのある顔がいた。そう、フリード・セルゼンである。前に彼の討伐任務で戦ったことがあるが、その時はコテンパンにやられてしまいアノス以外のメンバーが瀕死の重体となってしまったのだ（そのとき、アノスは自宅で夕食中だった）。

「おやおや、誰かと思えばあのとときの悪魔さんじゃくはないですか！なにに、今度は俺ちゃんに殺されに来たんですか？いいねいいね、ぜひ俺ちゃんにやれさせてくな！」

「俺たちは、お前にやられに来たんじゃない！リベンジマッチをしにきたんだ！」

「そうだよ。前回は負けたけど今回は負けないよ」

「今回は、負けません・・・」

フリードの言葉になぜか一誠だけでなく、木場も燃えているが、小猫だけは普段通り落ち着いた雰囲気醸し出している。しかし、内心では秘かに燃えていた

「さいですか！なら死んでちょ」

「!!」

一誠たちの言葉を聞いたフリードは、地面を蹴り片手に剣もう片方の手には銃を持ち切り込んできた

それを一誠はギリギリの所で回避し、木場は背後に回り反撃を小猫は教会内にあつた長椅子を持ちあげフリードに向かって投げつける

フリードは、向かってくる長椅子を真つ二つに切り、後ろにいた木場の剣を弾き、一誠の腹に蹴りを入れ間合いを取った。腹に蹴りを受けた一誠はその勢いを殺せず壁に激突したことで悶絶し、木場はバランスを崩していた

「そこまでだ」

その時、扉の方から聞き覚えのある声が聞こえた

「麗・・・央」

「麗央君」

「麗央先輩」

そう、扉の所にいたのは麗央とサーシャ、ミーシャだった

「よく、耐えたな。あとは、俺に任せて先に行け」

「ああ、任せたぞ」

「お願いします、せんP「ああ〜お前は俺の足を焼け落としたやつ！あのときは、よくもやってくれたもんだね〜」

「ほう、覚えていたか。それにしても、前回の戦闘でお前の足は焼け落ち、片腕は高温の火傷で使い物にならなかつたはずだが？」

「そうだったよ！だがな、あの後義足を作ってもらい、今じゃ自由に使

えるようになったのですよ！それと、使い物にならないと思ってた片腕は攫った子の神器（セイクリッド・ギア）で治してもらったのよ」
「なるほどな、また面倒なことをするもんだな」

一誠たちはフリードとの戦闘をアノスたちに任せ、前にサーシャから聞いていたアーシアがいる部屋に繋がっている教壇を破壊し、先に進んで行った

一方、アノスはというとフリードのその後を聞きながら興味なさそうに自分の前に、先の戦いで使った起源魔法 獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）を展開しようとしていたが、サーシャに止められてしまった

「麗央、待って」

「サーシャ、どうかしたか？」

「あいつは、私がやるわ。なんでもかんでも麗央にやらせてたら配下の示しが見つからないわ。だから、麗央は後ろで見せて。それとミーシャ今回は手助け無用よ」

「わかった、そういうことならお前に任せよう」

「わかった・・・手出さないでおく・・・」

サーシャがフリードの前に立つと、サーシャになら勝てると思ったのか考えもせずに突っ込んできた

サーシャはそれをひらりと躲し、フリードの腹に魔力で強化した拳をめり込ませた

「…グハアッ！」

サーシャの拳を受けたフリードは、地面を何回もバウンドしながら壁に激突し瓦礫に埋もれていた

暫くして、瓦礫から出てくると「これはアカン！ほんまにアカン」と言いながら懐から閃光弾を取り出し、床に投げつけた。光が収まると、そこにフリードの姿はなかった

「逃げたか・・・」

「アノス、ごめん逃がしたわ・・・」

「別に気にすることは無い。またいずれ会う。それより、サーシャよ今の戦闘カッコよかったぞ」

「本当？」

「ああ、本当だ」

「あ、ありがとう／＼」

サーシャを褒めていると、外から強大な力を感じ外に出てみると、そこにいたのは10歳ぐらいの背丈でなぜか胸元には×印の書かれたテープが貼られている女の子が立っていた

「お前さんは、何者だ？」

「我、ウロボロスドラゴン オーフイス。無限龍なり。強大な力の持ち主は、お前か？」

外にいたのは、なんとドラゴンの中でも最強と謳われる無限龍オーフイスだった

「ほう、これは大層なやつがでてきたもんだな。強大な力の持ち主は俺だ。なにか用か？」

「我、お前、気に入った・・・名は？」

「暁麗央。」

「暁・・・麗央・・・」

「なぜ、俺の所に来た？」

「我、静寂も好きだが・・・強いやつの傍も好き」

オーフイスの目的は、どうやら強大な力を持っている麗央だったようでその証拠に近くにいたサーシャとミーシャには微塵の興味も示さなかった

(要するに、オーフィスは静寂も好きだが強い奴の傍にいるのも好きで、俺から強大な力を感じたから傍に居させて欲しい・・・と言ったところだな)

「いいぞ、気が済むまで俺の傍に居ろ」

「わかった・・・話が早くて助かる・・・」

この光景を後ろから見ていたサーシャとミーシャは、「また、面倒なことして」と言ったような表情をしていた

それから暫くすると、中からなにやら鳴き声が聞こえて来た
気になり、中に入ってみると最前席の長椅子に意識がなく心臓が既に止まっている少女が横たわっていた

アノスはその彼女を見て死んでいる理由はおそらく神器(セイクリッド・ギア)を抜かれたことだと彼女の手の上にある2つの指輪を視察した

それからというもののアノスは彼女の死体を見て悲しむわけでもなく、(また会ったな)程度にしか思っていなかった

一誠は、大泣きをしていたが・・・

(よくもまあ、知らない奴のために流せる涙があるものだな)と一誠を見て歓心していた

「部長、アーシアを助けてください!」

「一誠、本当に彼女を助けない?」

「当たり前です!俺は・・・アーシアを助けたいです」

「そう、わかったわ。でも、アーシアの面倒は貴方が見ることこれが条件よ」

「わかりました。アーシアの面倒は俺が見ます」

「良い返事ね」

そう言うとりアスはスカートからのポケットから僧侶（ビショップ）のチエス駒を取り出し、アーシアの手の上に乗せ何かを呟いていた
すると、死んでいたはずのアーシアの手がピクツと動き薄っすらと目を開き始めた

「貴方は？ 私は確か：レイナーレ様に攫われて・・・それから・・・指輪を奪われて・・・意識がなくなって・・・？」

アーシアが死ぬ前の記憶を辿っていると、一誠がアーシアを強く抱きしめ号泣していた

それから数分して一誠が泣き止むと、今回のことを一誠がアーシアに説明していた

「そうですか・・・私、死んだんですか・・・」

「ええ、そうよ。貴方は一回死に、悪魔となったのよ。だから、これからは、私の下僕として私のために働きなさい」

「わかりました。これからはリアスさんのために働きます。どうかみなさん、よろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いしますわね」

「よろしく、アーシアさん」

「・・・よろしくです」

「よろしく頼むぞ」

アーシアが眷属になったのを、受け入れているとりアスがやつとさつきから麗央の足元にいる少女に気が付いた

「それで、麗央。その子は一体なんのかしら？」

「こいつか？ こいつはな無限龍オーフィスだ」

「「「「・・・」」」」

アーシア以外の眷属たちは、驚き発言によりフリーズしていた

そんなことを他所に麗央は言うことを言って満足したかのようにサーシャとミーシャを連れ自宅に転移して行ってしまった

結局、リアスたちのフリーズが解けるのは麗央たちが転移してから数十分経ってからだった

訓練前日

アーシアを悪魔に転生させ、オフィスが麗央の家に来てから数日が経った

因みにだが、アーシアは現在一誠の家に居候中である

今日も麗央たちは決まった時間に起き、朝食を食べ、学校に登校し、オカルト研究部に行って帰るという至って穏やかな日常を送っていた

現在の時間は、朝の7時

へチュンチュン♪チュンチュン♪

窓からの一筋の光と外から聞こえる鳥の囀りを聞いて麗央はだんだんと意識を覚醒させていく

「もう朝か・・・早いな・・・」

いつも言う言葉を言いながら起きようとするが、起き上がることはできなかった

最初、金縛りかと思っていたが横を見るとサーシャが麗央の腕に抱き着きながら寝ていた

まさかと思い、反対側も見てみると今度はミーシャが麗央の腕に抱き着きながら寝ていた

「まったく、こいつらは・・・俺の気も知れないで・・・」

と独り言を呟き、この状況をどうしようかと考えていると運よくサーシャが目覚ましが鳴った

その音を聞きサーシャは「んゝ・・・」と唸ったが起きる気配が微塵もなかった

反対側のミーシャはというと、目をパツチリ開けこちらを見ていた
その距離にドキツとしたことは言うまでもない

「麗央、おはよう・・・」

「ああ、ミーシャ、おはよう」

「サーシャは・・・起きた?」

「まだ、寝ている。まあ、起こすのはもう少し後でもいいんじゃないか
?」

「わかった」

返事をするミィシャはベッドから起き上がり、魔法陣を足元に展
開し、麗央の目の前で早着替えをして部屋をあとにした

麗央はというと、まだ着替えておらずサーシャの寝顔を眺めたり、
写真に収めたりしていた

それから数分して麗央も部屋を出ていきリビングに向かう最中に
足元に魔法陣を展開して早着替えをして、リビングに降りて行った

リビングに着くと既にテーブルに朝食が並べられていてミーシャ
とジャンヌが洗い物をし、アルトリアとシンは椅子に座り寛いでいた

「おはようございます、マスター」

「おは〜」

「おはようございます、我が主」

麗央がリビングに来たことに気づいたジャンヌ、シン、アルトリア
は麗央に挨拶をした

シンに至っては、毎回軽い感じで挨拶や口を利いてくるがやること
はやってるので口調や態度に関して麗央もなにも言うことはない・・・
転生前のシンはこんな軽い奴じゃなかったんだがな・・・まあ、こ
れもこれで一興だからいいか・・・

「マスター、そろそろサーシャを起こして来てもらえますか？」
「ああ、いいぞ」

ジャンヌの頼みを聞いた麗央は自室に戻りサーシャを起こそうとした……

が、一向に起きる気配はなかった

何回揺すつても起きる気配がないと思った麗央は以前アルトリアから聞いたことを試そうとした——それは目覚めのキスだ

なぜこうなったのかというと、以前サーシャが朝弱く起きられないことをアルトリアに相談すると彼女は「なら、目覚めのキスをすればいいのではないか？西洋だと目覚めのキスは常識だぞ？」と言われ、それで起きるのか疑問に感じた麗央は今それを試そうとしていた

ちゅッ

普通、寝ている相手にキスをする場合頬や額にするのが常識だが、麗央はそんなの関係なしに唇にキスをした

その結果、唇に違和感を感じたサーシャは一瞬で目を覚ました
すると、サーシャは苦しそうにしていた

「んん!?んーん!!」

苦しそうにしているサーシャに気づいた麗央はやつとサーシャから唇を離れた

離すとサーシャは顔を真っ赤にしながらモジモジしていた

「れ、麗央……いきなり何するのよ……なんで私に……き、キスしたのよ!!／／／」

「なに、以前アルトリアから朝弱い奴を起こすにはキスが良いと聞いたからな」

サーシャはモジモジしながら自分にキスをしたことを尋ねてみる

と、麗央から返ってきた理由に呆然としていた

しかし、内心では小さくガッツポーズをしながらアルトリアに感謝していた

「嫌だったか？機嫌を損ねたのなら次回からは普通に起こすが？」

「い、嫌じゃ・・ない、わ・・よ」

「そうか、なら次もこれで起こすか？」

「・・・う、うん／＼」

サーシャは顔を赤くしながらも照れを隠すかのように足元に魔法陣を書き着替え部屋を出て行った

サーシャがリビングに着くとそれに気づいたメンバーは既に朝食を食べながら挨拶をしていた

それから少しして麗央もリビングに着き、食べ始めた

食事中の話題は今日の予定やなぜサーシャの顔が赤いのか、学校生活はどのようなかなど様々だった

そんな他愛のない話をしていくとすぐに朝食を食べ終えてしまったため、各々食器を下げ、オーフィス以外家事をし始めた

家事が終わり、時計を見ると時刻は8時になっていた

そろそろ家を出ないと間に合わない時間となっていた

時計を見た麗央たちは「「いつてきます（くる）」」と言って家をあとにした

家から学校まではゆっくり歩いててもせいぜい15分ぐらい、全力で走れば10分もかからずに着く距離にあった

歩いている途中にサーシャが朝思ったことを聞いてきた

「そういうえば麗央、朝ご飯食べた後からオフィスの姿がないけど彼女はどこに行ったの？」

「ああ、あいつなら・・我、ここにいる・・」

サーシャの問いに麗央が答えようとすると、アノスの左手に赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）が出現し、宝玉からオーフィスの声が聞こえた

「どうやら、オーフィスは神器の中にいるようだ・・
それを見たサーシャとミーシャは驚きを隠せないでいた

「ちよつと、こんなところで神器を出さないでくれるかしら?! 誰かに見られたらどうするのよ!」

「危ない・・」

サーシャはどうやら神器の中にオーフィスがいるのに驚いたわけではなく、突然神器が出現したことに驚いたようだ・・

「我、呼ばれたから出て来たのに・・怒られた・・」
「・・・」

オーフィスがしよぼくれてしまい、サーシャは流石に言い過ぎたと思っただ・・

「すまないな、オーフィス。詫びに今日一緒に寝てやるから許せ」
「わかった・・それで許す」

今夜、麗央と寝ると約束するとオーフィスは機嫌を取り戻したちなみに、宝玉からドライグの気配は感じられなかった

そんなこんなで一悶着あったものの無事に学校に着いた靴を履き替え、自分の教室に行き席に着くと廊下が騒がしくなり始めた
特に気にしなかった麗央はサーシャ、ミーシャと雑談をしていた

すると扉の前にある人物が立っていた―それは塔条小猫だった
小猫は無言のまま教室に侵入し、麗央の元まで歩いてきた

その光景をクラスメイトたちが黄色い歓声を上げながら見ていた

「小猫、どうしたのだ？」

「・・・」

麗央が要件を聞くと、小猫は顔を麗央の耳元まで近づけ囁くような声で「麗央先輩今日の放課後、時間ありますか？」と聞いてきた

その問いに麗央も小猫の耳元で囁くような声で「空いてるぞ」と呟き、小猫はまた「なら、部室に来てください」と囁いた

それを見ていたサーシヤは顔を赤くし、ミーシヤは笑っていた

しかし、クラスメイトたちからしたら小猫が麗央の頬にキスをし、麗央も小猫の頬にキスを仕返したように見えていたため教室内は黄色い歓声に包まれていた

用事が終わると小猫は何事もなかったかのように教室をあとにし、帰っていった

それから麗央は一日分の授業を普通に受けていたが、サーシヤは朝の出来事にヤキモキしながら心ここに非ずの状態で授業を受けていたため、なにも頭に入って来なかった

放課後になってもサーシヤの頭の中は朝のことではいっばいだった

「(なんで、私、こんなにもヤキモキしてるのよ！確かに麗央のことは好きだけど・・・これってヤキモチかしら？わからないわ・・・でも、あの子だけには取られたくないわ！)」

麗央は朝の約束通りオカルト研究部に向かって歩いていった

サーシヤも麗央の後をついていった・・・

すると考え事をしていて気づかなかったが自分たちは既にオカルト研究部の扉の前にいた

すると、アノスはなんの躊躇いも言葉もなく扉を開け中に入ってしまった

「これで全員揃ったわね。今回呼んだのは、ライザーとのレーティング・ゲームの日程が決まったからよ」

「部長！それでいつになったんですか？」

「今日から10日後よ。場所は、レーティング・ゲームのためだけに作った異空間よ」

リアスの言葉を聞き麗央以外の眷属は驚いたような顔をしていた
そこに続けてリアスがあることを提言する

「明日から10日間、私たちは強化合宿をするわよ！」

「強化合宿は賛成ですけど、どこでやるんですか？」

「私のとうかグレモリー家の別荘だよ」

「なるほど」

眷属たちはリアスの熱に押されながらもやる気は十分のようだが
話が終わり、今日の所は解散となった

部室をあとにし、夕飯の食材を買い帰宅したアノスたちはリビング
で寛いでいた

「マスター、今日の夕飯は私とアルトリアで作りますね♪楽しみに
していてください」

「ああ、楽しみにしている」

素晴らしいキッチンに立っているのはジャンヌとアルトリアだった
しかも、2人ともエプロン姿で、だ・・

「(普段見慣れないから新鮮だな)」

麗央は2人のエプロン姿に見惚れていると、急に玄関のチャイムが

鳴った

玄関に行き、誰が来たのか確認すると、そこには驚きの人物がいた
麗央は、見知った人物であることを確認し、家に招き入れた

彼の恰好は、黒のズボンに、黒のパーカー、更にその上に黒のジャケットという全身黒コーデだった

「久しいな、アイヴィス」

「お久しぶりございます、我が君、暴虐の魔王、アノス・ヴォルディゴート様」

2人が挨拶をしていると、ジャンヌやアルトリア、シンは誰？といった顔をしていた

その視線に気づいた麗央は3人にアイヴィスを紹介した

「こいつは、アイヴィス・ネクロン。俺が転生する前に俺の血を分けて作った忠実なる配下だ。アイヴィスよ、こつちじや今は暁麗央だ。麗央と呼べ！」

「畏まりました、麗央様。我が君、暁麗央様の忠実なる配下、アイヴィス・ネクロンと言う。そして、その双子の始祖にあたる。よろしく頼む」

「私は、ジャンヌ・ダルクです。こつちこそお願いします」

「我は、アルトリア・ペンドラゴン。わかりやすく言えばアーサー王である。以後、よろしく頼む」

「久しぶりですね、アイヴィス。」

「おおく其方はシンⅡレグリアではないか！久しいな！」

「ええ、あれから結構な月日が流れていますからね」

「それにしても、アイヴィスよく俺がアノス・ヴォルディゴートの転生体だとわかったな」

「造作ありませんこと。いくら見た目が違ってもその懐かしい魔力を間違えるはありません」

「なるほどな」

ジャンヌやアルトリアがアイヴイスに挨拶をし、シンと久しく話している。サーシャとミーシャがひよつこり顔を出した。

そして、リビングにいるアイヴイスを見て驚いていた。

「アイヴイス様!?!なぜこちらに?」

「麗央様の寵愛を受けし双子よ、久しいな。驚くことではない我々七魔皇老も暴虐の魔王の後を追って転生したまでだ」

「そうだったのですね!お会いできて嬉しいです!」

「私も・・・」

アイヴイスとサーシャ、ミーシャが話していると麗央が口を挟んできた。

「アイヴイス、イドラやメルヘイスなども転生しているのは本当なんだな?」

「左様でございます、麗央様」

「そうか、これで俺の眷属は全員揃ったというわけだ」

七魔皇老が全員転生していると聞き、麗央は悪魔のような笑みを溢した。

まあ、本当に悪魔なのだが・・・

「しかに、麗央様。麗央様の雰囲気は以前と違うのはなに用で?」

「ああ、以前転生したときにこの街の管理をしている悪魔に出くわしてなそやつの眷属になったのだ・・・まあ、最終的には裏切り俺の敵か眷属になるがな・・・」

「なるほど、要は潜入しているということですか」

「そういうことだ。それと、アイヴイス。明日、俺と共にある場所に行きあることをしてもらおうぞ。詳細は明日着いたら言う」

「わかりました、その任お受けしましょう」

「翌日」

え？時間進むの早いつて？

だって、昨日の夜なんて特になにもしてないぞ？

あのあと、ワイワイ話してアイヴィスに部屋を教えて、サーシャとミーシャとお風呂入って、一緒に寝ただけだぞ？

現在、朝の5時

外はまだ暗く、歩いている人は数人しかない・・・

そして、現在家の前にリアスと大荷物を持った眷属たちがいて、サーシャがリアスにブチギレている・・・

「あのさ、アンタ今何時だと思ってるのよ！いくら合宿するからってこんな時間に来るんじゃないわよ！」

「早い方がいいでしょ？その方がたくさん特訓できるでしょ？」

「アンタねえ!!」

マズイ、マズすぎる！

このままでは計画が消えてまうー！やめてー!!

口調が変わったのは許して？この状況なら仕方ないから！だって、目の前で一方的な蹂躪が行われようとしているんだから!!

暫くすると麗央も落ち着き始めたのか口調がいつも通りに戻っていた

だけど、サーシャの言ってることも一理あるよな・・・

しかし、ここは助けてやるか・・・めんど・・・

「サーシャ」

「なによ！今、大事なところなんだから！」

麗央がサーシャを呼ぶと、サーシャは怒鳴り声でこつちを見ずに返事をした

　どうやら、サーシャの感情メーターは怒りに振り切っているようで既に戦闘態勢に入っていた

　仕方なく、麗央はサーシャを力づくで振り向かせ、突然唇にキスをした

　その光景を目の当たりにしたりアスと眷属たちは頬を真っ赤にさせていた

　一方、サーシャはというと突然のことで頭が追い付かず、ブツブツ何かを言っていた

「リアス、お前あのままだったらサーシャに滅ぼされていたぞ。それにサーシャの方にも一理あるからな？」

「そうね、ごめんなさい。今度から気を付けるわ」

「そうしてくれ。と言っても来てしまったのは仕方ない。行くとするか」

「ええ・・・」

　麗央は一旦家に戻り、ジャンヌたちを呼びに行き、ついでにサーシャの荷物と自分の荷物も持ってきていた

「お前たちは俺の魔法陣に乗れ」

「はい!!」

　麗央の配下たちが返事をするや麗央とリアスの足元に魔法陣が展開され、それに乗り目的地まで転移した

　一瞬で目的地に着くと一誠やアーシアは「凄い!!」と言いながら興奮していた

　逆に木場や小猫、朱乃は冷静にしていた・・・どうやら何回か来たことがあるみたいだ

「今日から10日間ここで特訓するわ！部屋は2階が男子、1階が女子部屋だから好きに使ってくれていいわ」

「はい！」

一誠とアーシアは元気よく返事をしたが、残りのメンバーは静かに頷いただけだった

「それと今日からの練習メニューを配るわよ」

素晴らしい懐から出したのは何枚ものプリントだった
よく見てみると一人ひとり違う内容が書かれていた
麗央は自分のや一誠のを見せてもらおうと、絶句した
そして、麗央が絶句しているのを見てサーシャやアイヴィスも観てみると絶句した

なにせ、この練習メニューが酷すぎなのだ！

「甘すぎだ。これはやる必要がない」

麗央が事実を言うと、それを聞いたリアスがキレた

「なんですって!?!やる必要がない？馬鹿なこと言わないで頂戴！」

「こんな甘々な特訓であの焼き鳥やろうに勝てると思ってるのか？」

「ええ、勝てるわ！」

「絶対に無理だ」

「なんで言い切れるのよ！なら、麗央にはこれ以外のメニューがある
と、いうの？」

「ああ、あるぞ」

キレているリアスの言葉に「ある」と言った麗央は異空間から紙を出し、魔法を使って文字を書き始めた

そして、数分して全員分の練習メニューを書き終え、それを渡した
その見た眷属たちは驚きの表情を浮かべていた
それもそのはず。なにせ、リアスが書いた練習メニューよりも具体的
に詳細に書かれていたのだから

「この紙を見たな？今から説明する。まず、一誠お前の力は基本的に
身体能力に準している。つまり、攻撃も防御も身体能力次第で上げよ
うがあるということだ。よって、お前の訓練は筋トレと鬼ごっこだ。
講師はそうだなシンとアイヴイスに任せる。できるか？」

「ああ、できる」

「お任せよ、我が君。やり遂げて見せます」

「なら、頼む。それとあいつを殺す気でやれよ？手を抜いたら俺がお
前たちを殺す」

「わ、わかった」

「了解いたしました」

麗央とシンのやり取りを聞いていた一誠は「お前、誰だよ！」と聞
く前に萎縮してしまい聞けずにいた

それをシンは察したのか軽い自己紹介をした

「シン＝レグリアです。麗央に殺す気でやれと言われたので貴方を殺
します」

「ひよ、兵藤一誠です・・・よ、よろしくお願い・・・します。」

「はい、よろしく」

一誠とシンのやり取りを見ていた麗央は、楽しそうだなと思いつなが
ら見ていた

「次に木場。お前の能力はそのおバカに教えてもらった。魔剣を作る
能力は確かに強力だが最弱でもある。たかが剣をたくさん作れる
だけ、それだけだ。それに作った剣には強度はなく脆い。そして、魔

剣以外をすることもできない。なによりお前自身、剣の扱い方も、扱うに必要な力も、そして自慢のスピードも足りない。すべてが欠点だらけだ。だから、今回お前の特訓は眷属内でもっとも厳しく辛い。それでもやるか？」

木場はアノスから指摘してもらった欠点がこんなにあるのかあるのか悔しそうな表情をしていたが、自分自身気づいていたところでもあったため反論できずにいた

なにより、「眷属内で厳しく辛い特訓」と言われて弱気になっていたこれは、仕方のないことだ・・

だって悪魔と言ってもまだ彼は17歳ぐらいの高校生なのだから・・・

しかし、木場は覚悟を決めた

「やります！僕は、どんなに辛く厳しい特訓にも耐えて、立派な騎士になつてみせます！」

「良い返事だ。なら、お前のその覚悟見せてみろ！」

「はい！」

「教えるのは・・アルトリア頼めるか？」

「任せろ。我が名は、アルトリア・ペンドラゴン。誇り高き円卓の騎士だ！」

「僕はリアス・グレモリー様の騎士、木場裕斗だ！」

「いいぞ、木場！死ぬ気で来い！私は手加減などせん！殺す気で行くからな！」

「はい！僕もアルトリアさんを殺す気で行きます！」

麗央が木場の指導をアルトリアに頼むと自己紹介を終えた2人は既に一触即発状態だった

どうやら、アルトリアを見て感化されたみたいだ

やる気が十分なのは良いが死ぬなよ、と心の中で願った麗央だった・・

「次にアーシア。お前には魔力コントロールの修業を受けてもらう」

「魔力コントロールですか？」

「そうだ。お前の聖母の頬笑み（トワイライト・ヒーリング）はこのメンバーの中で一番重要な立場にある。しかし、お前はまだ使いこなせていない。普段から対象者の所に行つて回復しているようだが、それでは敵にいつ殺されてもおかしくない。じゃあ、護衛を付けられれば思うかもしれないがこの人数でお前に護衛を付けるわけにもいかない。だから、いちいち仲間の所まで行かなくても離れた場所からの確に傷を回復できるようになつてもらおう。それに加え護身術程度の魔法も覚えてもらうぞ。それと護身術の講師はまたあとで発表する。まずは、魔力操作に集中しろ」

「はい！私、頑張ります！」

「その意気だ！指導は――ミーシャ頼めるか？」

「ん・・・任せて」

ミーシャに頼むと表情は普段と変わらないが、いつもより穏やかな表情で口角が少し上がっていた

まあ、ミーシャは普段から勉強以外をあまり教えることがないから楽しみなのだろう

「次にリアス、朱乃、小猫。お前たち3人には俺とサーシャが指導してやる。まず、小猫と朱乃には隠している力を引き出してもらおう。それも戦闘中にだ。もし引き出せなくて死んだら自分を恨めよ？それができたら次の段階に進む。次にリアス。お前は魔力の扱いが下手だ。なんでもかんでもデカイ魔力をぶつけければ良いと思つてないか？それ故、お前にはアーシアと同じ魔力コントロールの修業を受けてもらう。それを小猫や朱乃と同じように戦闘中に見つけてもらう。決して手を抜くつもりはない。サーシャもこいつらを殺す気でやれ」

「・・・」

「わかつたわ」

各自への練習メニューの提示と指導者宛てが終わり、ホツとしてい
ると先程までいたシンやアルトリア、木場やアーシアたちがいつの間
にかいなかった

「さて、俺たちも行くぞ」

そう言い残し森の中へ行くとそのあとをリアス、朱乃、小猫、サー
シャが付いてきた

訓練①

一誠です。

早速ですが、今超絶大ピンチです

「なんなんだよ、あの2人・・・日に日に攻撃が激しさを増してないか？」

「(ああ、増している・・・本当にお前を殺す気のようにだぞ・・・全ての攻撃が急所を狙ってきているし、それに魔力にも殺気を孕ませているしな・・・)」

「そんなんでは、私たちから逃げ入れませんよ！」

「なら手加減してください！」

「しませんが！」

なんで、こんな状況なのかという特訓が始まってから既に3日ぐらい経過しているわけだが、昨日調子に乗った俺がバカだった・・・昨日はいつも通り、筋トレ1000回を15セットやって、そのあと鬼教官による鬼ごっこをしたのだが2日目ということもあり余裕だった。そのことをシンさんとアイヴィスさんに言ったら今やつている鬼ごっこが地獄と化してしまった・・・

既に俺4回ぐらい死んでるし・・・そのたびにシンさんに蘇らせてもらってるし・・・

「死になさいー！」

「いたしません!!ドライブ、ブーストは溜まったか？」

「(まだだ、あと2回ぐらいで満タンになる・・・)」

「あと2回・・・10分ぐらいか・・・もつかないか？」

「(それは相棒次第だ・・・)」

俺は今、ドライブに頼んであの魔法攻撃を打ち消せるぐらいのドラゴンショットを打てるようにブーストしてもらっているが1回でも

溜まるのに5分はかかる。ということとは、満タンになるまで10分はかかるという計算になるわけだが・・・正直今すぐにでも打ちたい・・・10分も逃げ切れない気がするし・・・

ガサツガサガサツ

シンさんから頑張つて逃げていると目の前にアイヴィスさんが草むらから出て来た

それに気づくと彼は悪い笑みを浮かべて手を伸ばしてきた。さすがにこれはマズイと感じた俺はまた別のルートに向かって走り出した。度々、後ろを見るとシンさんとアイヴィスさんが追つて来ないことに疑問を感じながらも見失ったのかと勝手に解釈して休むことにした

「なあ、ドライグ俺この特訓で強くなってるのかな？」

「(相棒、お前さんは気づいていないかもしれないかもしれんが確実に強くなってるぞ？あの2人のおかげで今まで以上に基礎体力は増えだし、ブーストの上限も伸びてきている。それに先程のドラゴンショットの威力見ただろ？前までは山を半分吹き飛ばす程度だったが今では山一個吹き飛ばしたではないか)」

「そう考えたら強くなってるのか・・・実感ないな・・・」

「まあ、そんなもんさ。そんなに落胆するな)」

「ありがとな、ドライグ」

休みながら俺はドライグに強くなってるのか聞くと意外と強くなっていることを知って驚いた。確かに前まではドラゴンショットの威力は山半分ほどだったけど、昨日撃ったドラゴンショットは軽く山一個は消えてたもんな・・・でも、それでもあの2人には勝てないんだよな・・・

それにこの訓練で俺は相手の気配を臆げだが感じられるようになった。

ただ、感じられるといってもシンさんとアイヴィスさんから感じられる殺気を頼りに感じているので今の所は大丈夫だが不意打ちなんかされると対処できない。

(はあ、気配感知もっと上達したいぜ・・・)

そんなことを考えているとだんだんとこっちに近づいてきている気配を感じた・・・この気配的にシンさんかな？

逃げる準備をしていると案の定シンさんが物凄い速さで走ってきた

それを見た俺はまた前へ前へと走り出した・・・
無心になり前へ走っていると急に道がなくなり崖になっていた

崖になっていることに気づいた俺は遂に足を止めてしまった

でも、後ろからはそんなの関係なしにシンさんが走って来る・・・目の前にはかなりの高さの崖・・・ここから落ちたらひとたまりもない・・・

するとシンさんが笑みを溢した・・・

(彼は、ここが崖だと勘違いしているようですね・・・本当はこの先に道はあるのですよ・・・ただ、アイヴィスの幻覚魔法によって見えないようになっているだけです。アイヴィスの幻覚魔法はスペックが高すぎてかなりの実力者でもない限り見極めるのは困難なんですよ・・・それに魔力が殆どない彼が見極めるのは無理でしょう。)

シンが内心で考えている通りこの先には実際道が存在する。しかし、アイヴィスの精巧な幻覚魔法によって隠されているにすぎない。

このことを理解しているシンはすぐに見抜けていたが、今のリアス眷属には見抜けるものは麗央ぐらいしかいない。それなのに、魔力の殆どない一誠が見抜くのは不可能に近かった。

そのため彼は本当に崖だと思い込んで足を止めてしまった。

どうしたもんかと一誠が考えていると崖下から何かが伸びて来て一誠の足首に巻き付いた。それと同時に先程まで幻覚魔法で隠されていた道も最初から道なんてなかったかのようにキレイに消えていた。

そのことに気づいた一誠は何事かと思ったが、よく考えてみればすぐに分かった。よくよく考えて見たらさつきから俺はアイヴイスさんの殺気がないことに疑問を抱いていた。彼は一体どこに？つと…そして、すぐに理解した。自分の足にロープを括り付けてきたのはアイヴイスさんだということに…

でも、理解するのが遅すぎた。

「うわあああああああー！」

頭ではわかかっていても体がすぐには動かずに結局そのまま崖下まで引きずり落されてしまった

崖下に引き続き落された俺は数分間意識がなかった…

暫くして目を開けると目の前にはアイヴイスさんの顔があった

「起きたか？」

「うん…」

「はいタッチ。今日もお前さんの負けだ」

アイヴイスさんの言ってることがわからなかった俺は今、特訓中であることに気づき飛び上がった

そして、それと同時にアイヴイスさんが言ってたことがようやく理解できた。どうやら伸びている間に俺は触られていたらしい…するといつの間にか近くにはシンさんがいた。

殺気が消えたことによって俺は気配を全くと言っていいほど感じとれなかった。

「はい、今日の訓練はここまでにしましょうか：日も沈み始めていますし」

「はい、ありがとうございます。」

俺はお礼を言い、アイヴィスさんが展開した魔法陣に乗った。すると目の前には、2日前に来た先輩の別荘があった。これを見てやっと一日が終わったと感じられた・・・

ちなみに俺の鬼ごっこの勝利条件は、期限内に一回でも2人から1日逃げ切ることだ・・・

前に鬼から見つかからないようににできるゲームをしたことがあるが、そのリアルバージョンだ。ただ逃げるだけでもキツイのにそれに加えて殺気を孕んだ攻撃も追加される。どう考えても無理ゲーだ・・・

辺りを見渡してみるとアーシアと木場は戻ってきていたが朱乃さんと小猫ちゃんも部長は戻ってきてないみたいだった

辺りもだいぶ暗くなってきたし、そろそろ切り上げないと危ないのではと思っていると朱乃さんたちが戻って来た・・・しかも、俺よりもポロポロの状態で・・・訓練前に着替えたジャージや体操服はほとんど意味をなさずに大事なところだけ隠している状態だ。イメージするならアマゾネスの衣装に近い感じだ

普段の俺なら興奮するシチュエーションなのだが、疲れすぎて頭が働かなかった。一方、アノスやサーシャちゃんはどうと無傷で服には土跡や汚れは一切ついていなかった

その姿を見て、一方的に負けたことは容易に想像できてしまった・・・

「今日の訓練はここまでだ。各自部屋で休んでいる。時間になったらジャンヌが夕飯を教えてくれるはずだ」

そう言われ、各々館に戻った

部長や朱乃さん、小猫ちゃんなんかは誰よりも疲れ切った表情をしていた

本来ならなにも聞かずにそっとしておくのだが、俺は気になってつい聞いてしまった

「部長、朱乃さん、小猫ちゃんお疲れ様です！特訓どうでした？」

「もう散々な目に遇いましたわ。」

「ええ、何回死に何回肋骨やら肋（あばら）を折られ、内臓を潰されたことか・・・」

「私なんて何回腕を切り落とされたか・・・」

そんな恐怖体験を聞いているとその光景を見ていたアノスとサーシャちゃんが近づいてきた

その気配を感じた3人はビクツ！と身体を震わせていた

「なんだ、まだいたのか」

「はい、部長たちはどんな訓練をしたのか気になってしまっただけ・・・」

「そうか、気になるなら見せてやろう」

そう言うアノスは手元に魔法陣を展開し、大きなスクリーンをだした

どうやら、訓練中の内容を魔法で録画していたらしい・・・

〜鑑賞中〜

「滅びなさい！」

「そんな攻撃効かねーよ！これでも喰らっどけ獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）」

「キヤアアアアアアアアア！」

そこに映っていたのは部長が賢明にアノスに向かって滅殺の魔力を使って銃みたく攻撃しているが全てアノスには届かず、片手で弾かれて反撃されている姿だった

その光景は、まさしく地獄絵図と言うには十分なものだった。だって、木々のいたるところが獄炎殲滅砲（ジオ・グレイズ）によって燃やされたり、地面には大きな凹みやクレーターが多数できている、空と陸に悪魔が4人いたり散々な光景だった。といっても悪魔に関してはよく見ると動いておらず、その場にずっと停滞しているように見える……

「あの、麗央さん。あの悪魔に見えるものはなんでしょう？」

俺は気になって聞いてみると予想外の返事が返ってきた。

「あーあれは俺が魔法で作りだしたオブジェだ。どうせなら地獄風にしたいじゃん？」

と笑いながら返事されてしまった。

その返事を聞いた俺は内心（この人、ヤバイ人だ……）と感じたのは内緒だ。

一方、朱乃さんと小猫ちゃんはサーシャちゃんと戦闘をしているが、こちらも酷かった

朱乃さんが空中から得意とする雷をサーシャちゃんに向かって落とすが、彼女はそれを何もせず打ち消した。何が起きたのかわからなかったけど、よく見てみればサーシャちゃんの目に模様が描かれており紫色をしていた。どうやら、その目で見たものなら何でも打ち消せるらしい……現に今も映像では打ち消しているし……

小猫ちゃんはどういうと体術戦を繰り広げているが、サーシャちゃんも見事な体捌きでやり返していく。小猫ちゃんが打撃を1つ与えると彼女は4つ5つ叩き込んでくる。何個かは小猫ちゃんも守れるが、さすがに全部から身を守ることは難しいようで2つぐらいは直撃し

ていた

それからしばらく見ていると、部長たちも疲れて来たのか初めよりも動きが単調になってきて、躲せていた攻撃も躲しきれず直撃させていた。でも、アノスとサーシヤちゃんは手加減するわけでもなく追撃をしている。なんか見るからにヤバそうな数の魔法陣を空や陸、部長や朱乃さん、小猫ちゃんがいる場所全部に展開して逃がさんと言うばかりに獄炎殲滅砲を一斉放出した。その数は多分だけど、数百とかそれくらいあると思う・・・

その数百もの獄炎殲滅砲を受けた部長たちは立ち上がれず、ひれ伏していた。その様子を空から見ている麗央達は生存確認をしに向かうと朱乃さんと小猫ちゃんは意識があるけど火傷が酷く、小猫ちゃんは右手が焼け落ち、左手は使い物にならないくらい真っ黒だった。そして、朱乃さんはどうやらギリギリのところまで魔力で身を守ったらしい。そのおかげで全身の高温火傷と爆風で飛ばされた際の骨折と打ち身程度だった・・・小猫ちゃんに比べたらまだましだけど、それでもかなりの重症だ・・・

で、部長が一番様態が酷かった。肋骨と肋が数本折れていて、それに加え内臓が潰されていた。

「サーシヤ、そいつは生きてるか?」

「この赤髪の子は死んでるわ。でも、そっちの黒髪と白髪のおチビちゃんは生きてるけど重症よ」

「そうか、ならその2人は後回しだ。まずはこいつを助ける」

いやいやいや、ちよつと待て!!サラツと今聞き捨てならないことを言ったよね?!

今、部長が死んだって・・・ってことは、今俺の前にいる部長はまさかの幽霊・・・?

勘弁してくれよ!俺、幽霊系苦手なんだけど・・・

「なにかしら一誠？」

映像を見ている最中に部長をガン見してたらしい……
俺の視線が気になって声をかけてきてくれた

「部長って幽霊なんすっか？」

「何言ってるのよ！私は、ちゃんとに生きてるわよ！」

「だって、死んだはずじゃ……」

「確かに今日何回か死んだけど、ちゃんとに生き返らせてもらったのよ……」

「なるほど……」

それからというもののあまりの残酷な訓練に見る気をなくした俺は
麗央にスクリーンを消してもらい、館に戻った

館に戻ると既に夕食の準備がされていて、メンバーをみると既
にお風呂に入ったメンバーが多かった

そして俺たちも席に着くと、みんなで「頂きます」の挨拶をしてか
ら食べた

感想としては、めっちゃうまい！絶妙な味付け加減だった

ちなみにメニューは肉じゃがや唐揚げといった肉を使ったメ
ニューが多めでした……あ、でも、ちゃんとに野菜類はあったから
ね？

それから夕食を食べ終わると話題は今日の訓練についてになった
わけだが、正直聞きたくない……

だって、またさつきスクリーンでみた光景を思い出すことになる
じゃん！忘れかけていたのに……

「まずは、ミーシャどうだった？」

「アーシアは筋がいい。魔力コントロールの才能がある。今じゃあ、

「一か所に魔力を集めるまでできた・・・でも、まだまだ訓練が必要・・・」
「そうか、ならそのまま続行だ。ご苦労さま」
「うん・・・」

ミーシャちゃんに褒められたアーシアは凄く嬉しそうにしていたな・・・

「次に、アルトリア」

「木場はまだまだだ。スピードは様になって来たが、それ以外はまだまだ。明日からもっと追い込むさ」
「程々にしとけよ」

木場、どんまい・・・死ぬなよ・・・

「一誠はどうだ、アイヴィス・シン」

「彼は神器のブースト容量が増えました」

「ほう？それで？」

「あとは基礎体力が増えたことで攻撃威力が爆発的に上がりましたが、まだ注意力と魔法に対する適正が低く過ぎます」

「それはマズいな・・・もっと追い込め。明日からは魔法戦多めにな・・・」
「了解した」

「オツケー」

俺、明日死んだかも・・・今日よりも厳しくなるなんて嫌だー！
でも、魔法戦だから今日よりかは楽なのかな？・・・

「それで、麗央様。その3人はいかがでしたか？」

「今日、こいつらと手合わせをしたんだが、まだまだだな。小猫と朱乃はもう一つの力を使わずに重症化したし、リアスに関しては未だにデカイ魔力でなんとかしようとしているし・・・明日からはもっとスパルタにして徹底的に壊すことにしよう。そうすれば、生存本能から力にも

目覚めるだろう・・・」

なんか部長たちの表情が引きつってね？

部長、小猫ちゃん、朱乃さん死なないでくださいよ？心を強く持つてください!!

今日の訓練の成果を報告しあって、明日の特訓メニューを修正したあとは各自部屋に戻り1日が終了したのだった。

訓練②

3日目の午前中――

あの厳しい特訓からさらに3日ほど経ち、訓練は更に厳しさを増した。

特に一番激しい戦闘を行っていたのが木場×アルトリアの所だった

木々は広範囲に薙ぎ倒され、地面にはいくつかのクレーターができ、さらに木場によって創造された魔剣が何百本、何千本と折られた状態で刺さっていた

「木場、そんなんじやお主死ぬぞ?」

「そんなのわかってます!僕もここで死ぬのはごめんです!」

アルトリアと木場は全力で戦闘をしているにも関わらず、魔力量の違いから木場は肩で息をしている状態だった。

それに比べ、アルトリアはというとまだ余裕があるみたいで汗は掻いているものの息は整っていた

2人は息を整えながら相手の出方を伺っていた

すると、2人の目の前を風が小さめな渦を巻きながらヒュウヒュウという音を立てながら通っていった

その音を合図に2人は勢いよく駆け出し距離を詰めた

その瞬間――

カキン!ガキン!カキン!ガキン!

と剣と剣とがぶつかり合う音が大気中に響いた。

何度目かの剣同士のぶつかり合いをすると木場の持っている魔剣

からピキツという音が聞こえた。魔剣の限界が来たのだ。

木場の創造する魔剣は見た目は完全な剣だが、実際の所その耐久力は極めて低く脆い。そして何合か打ち合いをしただけでも、すぐにひびが入り折れてしまう程だ。

だから木場はこの戦闘中にあることを思いついた。それは、今ある魔剣に過剰に魔力を流せば耐久力のある魔剣として使えるのでは？というものだった。

アルトリアの剣技を捌きながら、木場は手にある魔剣にいつも以上の魔力を流すことにした。すると手に持っていた魔剣の刃に自分の魔力が薄くコーティングすることができた。

ここで問題が起きた。そう、魔力を薄く延ばすこと自体難しいことではないが思っていた以上に魔力消費が激しく数分もつて3分ぐらゐが限界だった。

木場の魔剣が途中から良くなったと感じたアルトリアは顔色は変えなかったが今まで以上に注意深く観察していた。そして、木場の魔剣の変化を見逃さなかったアルトリアは、チャンスだと思ひ魔力を少しだけ注ぎ木場との距離を一瞬にして詰め重い一撃を叩き込んだ。

パリン

木場の剣はアルトリアの重い一撃に耐え切れず、ついに半分に折れてしまった。

剣が折れたことに木場は一瞬焦ったものの急いで次の魔剣を創造しようとするが、先程の魔力コーティングで魔力を全て使い切ってしまったそのまま前に倒れ込んでしまった。

アルトリアは倒れ込んだ木場に「木場、今日もお前の負けだ」と一言呟き、彼を担いで館に戻ることにした。

館に戻ると既にテーブルの上には2人分の料理が並んでいた。どうやら、今日は木場とアルトリア以外夕方まで帰ってこないらしい。

要は残りのメンバーはめっちゃハードなスケジュールで訓練を行っているようだ。

因みに、今日の昼食はオムライスだ。それにスープとサラダ、ドリンクが付いている。

★★★

昼食後――

午前中に訓練をした森の中まで戻ってきた。

そして、着くとアルトリアが木場にふいに質問をした

「木場、お前はなぜ強い魔剣を作ろうとはしない？」

木場はすぐに答えることができなかった。

だって、それは自分が一番聞かれたくない質問だったから……

別に強い魔剣を作ろうとしなかったわけではない。訓練が終わった後も自室で作ってみたりもした。しかし、いくら作ってもできるのは見た目が強そうな剣ばかりで強い剣はできなかった。

アルトリアが言ってる『強い魔剣』とは芯がしっかりとっていて、耐久力も申し分なく数合打ち合っただけで簡単に折れない魔剣のことを言っていると木場は感じている。でも、未だにできていなかった……

それから暫く考えた。

「……いえ、前に耐久性のある魔剣を作ってみたんですけど、できたのはいかにも強そうな魔剣だけで強い魔剣はできなかったんです……」

その返事を聞いたアルトリアは、鍛える場所優先順位を間違えたか、と思った。

アルトリアの頭の中では、既に木場は芯がしっかりとっていて、耐久力も申し分なく数合打ち合っただけで簡単に折れない強い魔剣を1、2本は創造することができると思っていた。だから、『なら私がやることは戦闘技術の指南と相手を観察することを教えればいい』と思っていた。しかし、実際に蓋を開けて見ると芯がしっかりといて、耐久力も申し分なく数合打ち合っただけで簡単に折れない強い魔剣を想像することができずにいた。こうなるともちろん、やることが変わって来る。まず『強い魔剣』を作るためには莫大な魔力が必要なので魔力の増幅訓練、魔剣を作るのに必要なイメージ訓練の2つが最初に追加される。

「なるほど。だが、魔法はイメージで成り立っている。だから、作るときにどんな魔剣を創造したいのか明確なイメージができれば作れるんじゃないか？」

「(それができれば、こんなに苦労していませんよ!!)」

と軽い感じに言われて木場の内心は荒れていた

午後の訓練も今までと同じくらいに激しく厳しかった

だが、ここで変わったことが起きた。それは簡単に飛ばされなくなったことだ。

今までの訓練だとアルトリアの攻撃を受ける度に何回も魔剣が折れたり、飛ばされていた木場だが、今の木場はアルトリアの攻撃を受けても5回に2回しか飛ばされなくなっていた。

それは、木場が打ち合っている内に芯がしっかりとっていて、耐久力も申し分なく数合打ち合っただけで簡単に折れない強い魔剣を創造することができていることを指していた。木場はアルトリアに言

われたあとどんな魔剣を作りたいのかひたすら脳内で考えていた。しかし、いくら考えても何も思いつかなかった。

考えるのをやめようと思ったときふと思ったことがあった。それは、作りたい剣が思いつかないのなら自分のアイデアを全部詰め込んでオリジナル魔剣を作ればいいのでは？と。

そこから木場は打ち合いの最中に脳内でオリジナル魔剣の製作にとりかかった。

そして完成したのがついさつきだった。

木場の手にあるのは柄が赤黒く刀身は黒曜石みたいに真っ黒な色をした片手剣の魔剣だった。

その剣から何かを感じ取ったのかアルトリアは剣を見た瞬間、口元をニタアとさせた。

「今までよりも様になってきたじゃないか！簡単に終わってくれるなよ!!」

「……!!」

狂気じみたアルトリアの怒涛の連撃をうまく捌いていた木場は、今まで手を抜かれていたと感じここからが本当の戦闘だ、と感じていた

「ほらほら、どうした！防戦一方じゃないか！戦闘は防御だけじゃ進展しないぞ?」

「……」

時間が経つにつれアルトリアの連撃はドンドン鋭くなり、スピードも増してきた。そのため、木場も全ての攻撃を捌ききれず頬や肩、太ももなどに切り傷がつくつたが、致命傷になり得る攻撃だけはなんとか凌ぎ切っていたため、まだなんとか戦える状態ではあった。

「……」

しかし、時間が経つにつれそんな木場の集中力も限界に近くなり、致命傷までとはいかなくてもかなりの数の傷を作っていた。そんな一方的な戦闘は気づけば夕焼けが見える時間まで続いた。そんなだが、それでも2人の特訓と言う名の蹂躪劇は終わらなかつた

「オラオラオラア！お前の腕はそんなもんか?!これまでの3日間お前は一体何を学んできたんだ！アあ?!」

「そうは・言われて・も・師匠の・連撃を捌くのに手一杯で・反撃する余裕が・な・いんですよ」

「そんな余つたるいことが戦闘中に通じると思っているのか!?相手は、待つちやくれない！お前を殺す気で、喰うきで仕留めにくるぞ?それを生きながらえるには戦闘中に色々な技や武器を臨機応変に使わないと死ぬんだぞ！」

木場を怒鳴りつけるように大声を出しながらアルトリアは、さらにスピードを上げたがこれも木場を思つての愛のムチだった。

そのスピードは傍から見たら既に音速の息に達しているのではと錯覚する者がいてもおかしくないほどの速さだった

木場はそのスピードに着いていくことができず、さらに体中に切り傷が増えることになってしまった。

それから3時間ぐらい経つて、外が完全に真っ暗闇になっていた。時間的には午後8時弱なのではと感じたが、外にいるため時間を確認することができなかつた

2人はゼエゼエと息を切らし始めていた

「次が最後の一撃だ・・・だからお前も全力で来い！」

「ええ、僕もこれ以上戦えそうにないです・僕が今出せる全力で師匠にぶつかりたいと思います」

「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）！」

「魔剣創造（ソード・バース）!!」

お互いが今出せる限界の力に全ての魔力を注ぎこむと空气中がキシキシと悲鳴を上げ、大地には大きなクレーターができ2人の周りにあつた木々や草花は1つも跡形もなく消えていた

アルトリアは、剣を両手で持ち真つ二つに切る構えをしている。一方、木場は今自分が作れる最硬度の魔剣を3本作りだし左右の手と口に魔剣を咥えていた。

数秒すると2人は真つ向からぶつかり合った

「・・・」

激しい一太刀を入れた2人は暫く立っていたが、先に倒れたのは木場の方だった

木場の両腕は肩から下が綺麗に切断されていた

一方、アルトリアはというとフラフラになりながらも剣を杖代わりになんとか歩けている状態だった。

容体は、木場よりも酷くはないが腕や肩・足・頬・二の腕・太ももの数か所に致命傷とは行かないまでもかなり深い切り傷が着いていた

「木場、最後の技はなかなかだった・・・ぞ」

アルトリアは、木場の最後の捨て身の技を褒めたあと、そのまま意識を手放した

★★★★★

暫くして目を覚すとアルトリアは目覚えのある天井の下にいた

「（確か、遅くまで木場と殺し合いをして・・・木場の両腕を切ったあと意識がなくなっただんだっけ？）」

アルトリアがつい先程までの記憶を鮮明に思い出していると、ドアが開く音がした

音のした方に首を向けるとアノスとサーシャが部屋にはいつて来た

「アルトリア、目が覚めたみたいだな。平気か？」

「大丈夫？」

どうやらアノスとサーシャはアルトリアのお見舞いに来たらしい
この際だから、と割り切つて倒れた後のことを聞いてみることにした

「アノス、私が意識を失った後のことを教えてくれないか？」

「構わん」

く回想中く

「ねえ、アルトリア帰ってくるの遅くない？」

サーシャの何気ない一言から事態が発覚した。

普段なら6時前には特訓を切り上げてこの別荘に戻って来るはずなのに、一向に戻ってくる気配がしなかった

これは、あの2人になにかあったのかも？と感じたメンバーは居ても立っても居られず別荘の周辺や森の中を探索することにした。そして、探索すること10分ぐらいで一番簡単な探索方法を見つけた。それは、魔力を薄くこの森全体に広げ、ヒットしたところを見に行くと言ったものだった。そのことを思いついたアノスは一生懸命探してくれているメンバーにそのことを告げず、勝手に行使した。その結

果、2つの魔力がここから数十キロ離れた場所にあることが分かった。その場所に転移（ガトム）を使って行ってみると両腕を肩から見事に切り落とされた木場とやたらと深い切り傷を負っているアルトリアを見つけた。なにがあったのか、どれほど激しい戦闘を繰り広げたのかは辺り一面の状況を見れば何となくわかった。

「随分と派手にやったな・・・」

アノスがそう一言呟くとアルトリアと木場、それと落ちている両腕を抱えて別荘に転移した

「木場とアルトリアを見つけたからすぐに別荘に戻って来い」

そう念話で送ると数分して全員一斉にノックもせず部屋に入ってきて来た・・・が、2人の状態を見て泣き出す者もいれば、吐き出しそうになる者などなんらかの症状を引き起こしている者たちがいた

アノスはしょうがないといった様子で木場の両腕を魔法でくっつけ、アルトリアの傷も完治させた

それからは、心配そうにしていたメンバーをリビングに強制転移させ、自分のその部屋から出て行った

それから一夜経ち、様子を見に来たらアルトリアが目を覚ましていたという状況だった

～回想終了～

「そうだったのか・・・迷惑をかけたな」

「なに、気にするな。だが、やりすぎだ。明日から気を付けろよ?」

「ああ、同じミスは起こさないさ・・・それより木場のやつは?」

「あいつならまだ寝ているぞ。一応、傷は治しておいた」

アノスはそう言うのと部屋から出ていこうとした

「そうか、ありがとう」

アルトリアは、部屋を出ていこうとするアノスの背中に向かってお礼を言った

それを聞いたアノスは振り返ることなくそのまま部屋をあとにした

それから数時間経つと、みんな目を覚ましリビングにズラズラと列を成しながら出て来た

その様子を見ていたアノスは不覚にも気持ち悪る、と感じてしまった

それから起きて来たメンバーにアルトリアが今朝、目覚めたことや今日の訓練は参加せず休養を取ってもらったことにしたなど、話していた

アノスの話を聞き終わった面々は木場に早く目覚めると思いながら朝食を取っていた。